僕のドスケベヒーローマンコ

はつのとうこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ミッドナイトを愛し、日々のオカズは決まって彼女だった少年、飛野雄二。

無個性としての自分を受け入れ、中学生活にも慣れ始めたある日。隣の家に香山睡と名乗る女性が引っ越してくる。

彼女の正体は、雄二が愛するあのミッドナイトだった。それに気がついた彼は、女性に対して極めて凶悪な個性を目覚めさせる事になる。

目次

ミッドナイト1 ―― 1
ミッドナイト2 ―― 9
ミッドナイト3 ―― 18
ミッドナイト4 ―― 28
爆豪光己1 ―― 38
爆豪光己2 ―― 46
ミッドナイト&爆豪光己1 ―― 55
入学試験 ―― 66
入学初日 ―― 76
ミッドナイト&爆豪光己2 ―― 86
放課後の保健室1 ―― 95
放課後の保健室2 ―― 109
放課後の保健室3 ――

ミッドナイト1

「隣に越して来た、香山睡（かやまねむり）と言います。これからよろしくお願いします」

彼女はそう言って軽く頭を下げると、「これ、皆さんでお食べ下さい」と紙袋を差し出して来た。

「あら、これはご丁寧に」

雄二の母は珍しそうな表情で受け取ると、立ち話もなんですから、と彼女を家に招き入れた。

今日は週の半ば。木曜の、家によっては夕食の準備に取り掛かるだろうかという夕刻の時間帯だった。

「今日引っ越して来たんですか？」

「ええ――」

そんな二人の会話を眺めながら、息子の雄二は呼吸を荒くして、香山睡と名乗った女性をじっと見つめていた。

「み、ミッドナイトだ……」

スーツを着ていても、普通の眼鏡をかけていても、雄二には分かってしまった。

胸元の大きすぎる膨らみ、むっちりしたお尻の肉付き。そして何よりサドッ気たっぷりの顔立ち。ネットで動画を調べては、何度もオカズにしたあの18禁ヒーローである。

そんな人が隣に引っ越して来た。

雄二は歓喜と驚愕と幸せと、とにかく雄叫びをあげたくなるような感情で胸がいっぱいだった。

「こんにちは」

じっと彼女を観察していると、向こうの方から声を掛けてきた。

「え、あ……っ、こんにちは」

雄二は身体を硬直させながら、それでも何とか言葉を返すことが出来た。頭の中ではお祭り騒ぎだ。ありえない、ありえない事が現実に起きている。

彼女はにっこりと微笑むと、よしよしと頭を撫でて、そのまま母に案内されてリビングへと向かった。

雄二は大好きなヒーローに頭を撫でられた衝撃で、どうにかなりそうだった。

あのミッドナイトが。自分の頭を撫でてくれた。

嗚呼、ミッドナイト。ミッドナイト。

僕の女に。僕だけを見て、愛してくれる人に。

ミッドナイト、好きだ。

「……!!」

その瞬間、雄二の個性が発動した。

それは今の今まで無個性だと思われていた雄二の、能力だった。

しかし、雄二はおろか、彼女すらそのことに気がつかない。

雄二はただ、母がいるこの場所で何かやれば面倒と判断して、ズボンに入りきらないほど大きくなったペニスを抱えながら、二階に上がった。

明日にでもミッドナイトの家に向かおう。普通ならば追い返されるかもしれないが、何故かそうならない確信があった。

三十センチ近くになった巨根を扱きながら、雄二は自室にこもった。スマートフォンに保存したミッドナイトの動画を見つつ、ティッシュを何枚もゴミ箱に放り込む。

「ミッドナイト……はぁ、はぁ……」

ぶぴゅ、と何度目かもわからない射精が、部屋の中に飛び散った。

ーーーーーーーー

今年で中学生になる雄二だが、毎年行われる身体検査のついでの検査では、例年通り無個性の判定を下されていた。

ここまでくると別段思うことなどない。同級生の友達はこの歳になっても未だ個性の発現を期待しているが、普通はここまで来たら諦めてしまうだろう。中には遅く個性が発現する例もあるらしいが、雄二は期待していなかった。

それより問題は身長だった。雄二はそっちの方がよっぽど心配だ。

背の順なら一番前。席替えでも背が低くて一番前。所謂ショタのあだ名で呼ばれる雄二は、身長だけはどうにかならないものかと日頃嘆いていた。

今日この日までは。

「え、私の家に……？」

「だめ、ですか……？」

上目遣いで、ミッドナイトを見上げる。

彼女の家、玄関先で、雄二はミッドナイトに対面していた。チャイムを鳴らして出てきたのは、私服に身を包んだ香山であった。

いつものコスチューム姿とは違い、昨日のスーツ姿とも違う。自分の体形を理解し、美しく見てもらおうと努力を惜しまない装い。休日故か化粧っ気こそないが、やはり美人だった。

「うーん……」

睡は顎に手を当てて悩む姿を見せた。どうやら昨日の母との会話で雄二が中学生だと教えられたらしい。

幾ら中学生といえども、男の子だ。独身女性の家にあげるのは如何なものか。親族でもないし。

そういった葛藤が彼女の中で行われていた。

「……いいわよ。でも面白いものなんてないからね？」

「うん……！」

結局、睡は雄二の容姿に油断した。

こんなに小さい子なら、問題なんて起きないだろうと、そう判断したのだ。

「……」

雄二は家に入ればこっちのものだと今から股間を盛り上がらせながら、睡のお尻を追ってリビングに。

間取りは殆ど自宅と変わらず、彼女の家も二階建てのごく普通の物だった。

リビングの中央には、ソファとテレビがあった。そこに座らされると、睡もまた隣に腰かけた。
「えっと……」
ここまで連れてきたのは良いけど、何をしよう。
そんな心の声が、彼女から聞こえてきた。
雄二もまたどうしようかと考えてみたが、あまり面白い話題はない。
「ミッドナイト……」
「え……？」
年上の女性と上手い会話なんて出来っこない。そんな考えと、大好きなミッドナイトの隣にいる緊張から、ついついそんな言葉が漏れた。
睡は聞き間違いかと目を見開いていたが、雄二の様子から何かを悟ったように頷いた。
「気がついてたんだ」
「えと……その、はい。一目見た時から」
「そんなに分かりやすかったかな？」
ヒーローとしてはバレた事よりも、あの姿からどれくらい見抜かれやすいのかが気になるらしい。

雄二はぶんぶんと首を振ってその言葉を否定した。無論、雄二からすれば瞬時にミッドナイトと判断出来るが、同じくヒーロー好きの母は気がついた様子もなかった。印象というものは、それほど簡単に塗り替えられるものではなく、テレビであれほど派手なコスチュームを着て戦う彼女と今の彼女では、関係など全くないように思えてしまうだろう。

「僕は、その、ミッドナイトが大好きなんです……」

ちょっぴり頬を染めて恥ずかしそうにそっぽを向いた。

ミッドナイトだと分かったのは、単純に彼女のことが好きで、何度も何度も動画を見返していたからだ。

オナニーを知った最近では、なおの事動画を凝視するようになった。戦闘中の乳の揺れ方、歩くたびに揺れるお尻の肉付き。それらを切り取った動画でも、秒単位で雄二はどのシーンか判断出来る。

そんな雄二だから、分かったのだ。

「嬉しいわ、ありがとう!」

睡は満面の笑みで頷くと、ぎゅっと抱きしめてきた。

わざとかどうかは知らないが、雄二の顔面に豊満な膨らみが当たる。

その瞬間、雄二の理性が弾けた。

今や金属のように硬くそそり立った、惜しげも無く彼女に押し付ける。
「え……!?」
もっこりとした膨らみに慌てて距離を取る睡だが、その時には何もかもが遅かった。
ガチガチに勃起した陰茎から、雄臭いフェロモンが放たれる。
「ミッドナイト、僕の物になってよ」

「――はい♡」

気がつくと、とろんとした目で、睡は雄二を見つめていた。
この瞬間から、香山睡は、飛野雄二（ひのゆうじ）の女となった。
紛れもなく、彼の個性によって。

ミッドナイト2

リビングのカーテンを締め切ると、睡は雄二に命令された通り全裸になった。

「どう？♡」

ぽいぽいと下着ごと脱ぎ捨てて、あっという間に全裸になる。

女性としては長身の部類に入る睡。そのプロポーションはとても日本人とは思えないほど起伏に富んだものだ。

ぷるんと前に飛び出した乳房は、慎ましやかとは口が裂けても言えない大きさだ。前にも横にも肥大した女性の膨らみは普段のコスチュームを脱いで更にエロティックに眼に映る。

そしてその巨乳の中央には、ピンと尖った乳首と、まん丸の乳輪。ヒーロー活動時には決してお目にかかれない、禁断の秘部。

思わず生唾を飲み込んでしまう。そして雄二はもぞもぞと股間を震わせながら、視線を彼女の下半身に向けた。

大きすぎる乳房の下には、一転して不安になる程細い腰のライン。急カーブを描くくびれには、こうして素肌でみると芸術的とすら感じる。

「はぁ、はぁ……」
雄二の視線は、荒い息の最中、性欲に従って進んでいく。
そのくびれの終着点には、肉感的なヒップが実っていた。
「んふ……♡」
睡は雄二の視線に気がついたのか、ゆっくりと見せつけるように後ろを向いた。軽く尻を突き出しながら、誘うように腰をフリフリと揺らしてくる。
胸に付いた膨らみと同じくらい、これまた女性的な魅力に満ち満ちたお尻であった。男であれば誰しもが手を伸ばすような、卑猥さと美しさに溢れた美尻。その美尻を支える、むっちりとした脚線美。
流石は露出の高さから法律改定まで引き起こしたスケベヒーロー。雄二はすっかり魅了されてしまった。
「ま、正直コスチュームでも露出してるようなものだからここら辺は抵抗ないんだけどね……♡♡」
睡のコスチュームはその肉感的な女体を前面に押し出したセクシーなものだ。半分全裸といっても過言ではない。
「でも、ここは違うわよ……♡♡」
そう言って雄二の方を向くと、両手を自身の股間に這わせた。

雄二はぽかんと口を開いたまま、身を乗り出して凝視した。

「よく見て、私のおまんこ……♡♡♡」

睡の手が、黒い茂みをかき分けてくぱりとそれを開いた。

丁寧に処理された陰毛の中に、ピンク色にテカる膣肉。男性の股間部とは違い、全体的に少しもっこりとした恥丘の中心に、睡の大切な部分が存在していた。

「うわ……」

この距離でもむわりと臭ってくる、雌の香り。変態とまで揶揄されるどすけべヒーローは、実際のところその通りだったようだ。

雄二は彼女のその香りに釣られるがまま、ゆるりと顔をそのおまんこに近づける。

ソファから降りて、四つん這いになりながら、マン毛が鼻の頭に付くくらい密着して、凝視する。

「良い匂い？♡」

「すごいエロい匂い、です……」

「良かった♡♡」

睡は嬉しそうに笑うと、自らの膣に指を差し込んだ。

中指と薬指、くちゅくちゅと手慣れた手つきで出し入れすると、一段と生臭い雌の匂い——臭いが強くなる。雄二は目の前で突然始まった行為に目が釘付けだった。

そのまま太ももに愛液が垂れるようになるまで、いやらしい水音を鳴らして膣をかき混ぜた。

「ん、ふぅ……♡♡♡」

そして、ぬぷりと抜き出した指には、ねっとりとした生暖かい愛液が付着していた。雄二が見上げると、睡は頬を赤くしながら、「あーん♡」と口を開けるように促してくる。

素直に口を開くと、今までおまんこに入っていた指が今度は雄二の口に入ってきた。舌の上におまんこ汁を塗りたくり、その後後頭部をしっかり捕まえて割れ目の部分を鼻に擦り付けてくる。

ふさりとした陰毛の中に、熱く淫らな膣肉。雄二は口と中に残った生々しい雌蜜を味わいながら、犬のように鼻を突っ込んだ。息をするだけでも頭がどうにかなりそうなほどエロスに満ちた悪臭。

「れろ……」

「はぁ、んっ……♡♡」

ネットで見たエロ動画の知識を総動員しながら、舌先を伸ばして膣口に這わせる。陰毛の生え際をほじくりながら、ぬめりのある中心へと舌を動かす。

表面をひっくり返すようにふわふわのラビアの裏側を舐めながら、穴を探してみる。しかし舌先だけで探すのは未だ中学生の雄二には女性経験の無さが致命的だった。結

局舐めるという行為に興奮し出して、マン毛ごとべろんべろんと舐め回す事にした。
「可愛い……♡♡」
睡は雄二の頭をがっしりと捕まえたまま、グイグイと自分の股間に押し付けていた。荒々しい愛撫だが、その不器用さがまたたまらなく愛おしいと、時折ピクンと背筋を震わせていた。
雄二のクンニは、たっぷりと長い時間を掛けて行われた。男子中学生、大人の女性の膣を独り占めとあっては、抑えが効かなかったのだ。
「も、もうゆるして……♡♡♡」
結果として、何時間も無遠慮に舐められ続けた睡は、足腰をガクガクさせながらソファに横たわっていた。唾液まみれでふやけたおまんこも、心なしかくたくたに見える。
しかし雄二は止まらない。睡の身体の上に寝そべったまま、左右の手で膣をくぱくぱと開閉しては粘着質に何遍も舐めて舐めて、舐め続ける。
「もう……それじゃ、こうするしか無いわね！♡」
「あっ、ちょっと……!?」
雄二が未だ興味津々と見た睡は、先程から気になっていた股間の膨らみに手をかけた。雄二の格好は半袖短パンとラフなもので、睡が別段力を使わなくてもするりとズボ

ンは脱げた。
そのまま流れるようにパンツまで脱がされると、ついに睡の前に雄二の個性が出現した。
「嘘……大きすぎ……」
ぼろん、と飛び出たのは、中学生には似つかわしくない馬鹿でかい巨根だった。グロテスクにそびえ立つビッグサイズは、物差しと同程度の長さにまで膨張している。
そして何より臭いだ。外に出た瞬間、むわっ、と広がった雄の臭い。爆弾のような玉袋をぶら下げた男根から、女であれば誰でも屈してしまうような濃厚なちんぽ臭が放たれた。
「あっ……♡♡♡」
その瞬間、睡は完全に雌にされた。鼻の上に重そうに乗った玉袋から、香りだけで孕ませてくるような重厚な臭気。目の前には女を内側から破壊するために作られたような巨根。
女である以上、絶対に抵抗できない、「雄」の魅力。それには圧倒的なまでの魅力があった。
香山睡は、その瞬間、雄二のために全てを捧げると誓った。
「はむ……♡」

気がつくと、玉袋を口に含んでいた。おにぎりのようなサイズ感の金玉を、口の中で舌を使って転がす。

雄二の口からまたもや焦った声が出た。しかし睡は微笑むだけで、今度は巨大な肉竿に手を伸ばす。

「あう……」

さすりさすりと愛おしそうにペニスの表面を撫でながら、ちゅうちゅうと袋皮に吸い付いてくる。雄二は初めて他人に急所を触られる違和感に苦悶の声を上げて、美女の股座に顔を埋めたまま沈黙した。

睡はそんな雄二の頭部を、柔らかい太ももで挟み込むと、逃げられないように抑え込んだ。辛うじて息ができるようにしてはいるが、荒い呼吸は常に彼女の秘裂を刺激してくる。

「んふ、ぢゅるっ、ぢゅるるるっ……♡♡♡」

ピクピクと身体を跳ねさせながら、睡の口淫は止まらない。玉筋を舐めるように舌全体でれろんとしゃぶりながら、しゅっしゅっと逆手の手コキで勃起を維持し続けてくれる。

時折思い出したように亀頭に触れては、くりくりと射精を促すように鈴口を弄ってきた。

経験豊富な大人の技術に、雄二は早くも限界だった。幾ら巨根とはいえ、彼はまだ童貞で、ただの中学生だった。それに個性も発現したばかり。

ぷるぷると腰が震えて、反り返った肉棒が戦慄く。

分かりやすく、雄二は限界だった。

「たっぷり出してね♡」と睡は大きく口を開くと、あろうかとか三十センチ近くもあるその肉棒を飲み込んだ。

少しでも彼に気持ちよくなってほしい。そんな雌の献身的な思いが、規格外の巨根を受け入れてしまっていた。

「み、みっどないと……!!」

ぬらりとした感触が亀頭に触れた次の瞬間、ちんぽ全てが口内に収められていた。雄二はついに我慢の限界を迎えた。

「むぐぅぅぅっ……!!?♡♡♡」

どぴゅ、どぴゅ、と肉棒の先端から種付け汁が炸裂した。食道の入り口までずっぽりと侵入した雄が、白濁液を撒き散らしていた。

粘度の高い、どろどろのザーメンが、喉の奥に流し込まれる。

信じられないくらい長い射精だった。その間無慈悲にも大きなペニスは完全に睡の気道を閉じてしまっていた。

なんとか呼吸しようにも、鼻の穴はこれまた肉棒に相応の玉袋がしっかりと覆っている。睡は呼吸器二つを塞がれて呼吸困難に陥りながら、それでも雄二が気持ちよく射精してくれている嬉しさから、激しい絶頂に達していた。

「ごぉっ……うぇっ……お……♡♡♡♡♡」

何度も脈動しては、射精を繰り広げる巨根。その度に絶頂を重ねては、睡は腰をひくつかせてぷしゅぷしゅと潮を噴き出していた。

雄二もまた、むちむちの太ももに顔を挟まれながら、とんでもない射精に意識を持っていかれていた。ちょろちょろと頬に当たる潮吹きに目もくれず、情けない声を出しながら喉の奥に精を吐き出していく。

大好きなミッドナイトに射精。その悦びはありえないくらい長く続いた。

「お、ご、ぽぉ……え……♡♡♡」

大量の精子に溺れかけて、睡は鼻から精子を逆流させながら白目を剥いていた。

ミッドナイト３

「凄いおちんちんね！　死ぬかと思ったわ!!♡♡♡」

無駄にハイテンションな睡は、ぐっとサムズアップしながら鼻から精子を垂らしていた。

雄二は尚も股間を硬くしていたが、あれだけの絶頂の後では流石に少しは理性を取り戻したらしい。

「すいません……」

ペニスのわんぱくさとは裏腹にしょんぼりとする中学男子。彼の頭の中は罪悪感でいっぱいのようだ。やり過ぎた後悔があるのだろう。

そんな雄二を見て、睡は優しく抱きしめる。

「大丈夫、君みたいな子を助けるのも、ヒーローの仕事よ」

「ミッドナイト……」

妙にキラキラした目で、雄二は睡を見上げた。彼からの好感度が跳ね上がっていると感じ取った睡は、子宮をきゅんきゅん疼かせて雄二の肉棒を思い返していた。

今すぐにでも、あの巨根で貫かれたい。もっと彼に好きになって貰いたい。そんな気

持ちが際限なく湧き出てくる。
不思議だった。なんだか、「強制的に」そう思わされている気がするのに、それを嬉々として受け入れてる自分がいる。
睡は頬を赤く染めて、小さく頷いた。
これが恋なのだと。そう思うことにした。
年の差なんて関係ない。この子の物になりたい。
「でも、ミッドナイトはみんなのヒーローだから……」
「っ……」
その通りだった。
幾ら彼に惚れてしまったとはいえ、そこは譲れない部分。自分がミッドナイトとして、香山睡の芯として存在しているのは、自分がヒーローだという事。
そこだけは何が何でも曲げられなかった。
「……だから、ミッドナイトじゃなくて、香山睡さん」
「……？」
急に佇まいを直した雄二に首を傾げつつ、次の言葉を待つ。
雄二は特に気負った様子もなく、真っ直ぐに睡の事を見つめて。
「僕だけのヒーローになってください」

「……」

睡は歓喜のあまり雄二を力一杯抱きしめていた。

この子はミッドナイトとしてではなく、香山睡という一人の女性を求めていた。

ヒーローの自分ではなく、女としての自分を。

「寝室に行きましょう……♡♡」

睡は雄二を連れて、寝室へと向かった。

ーーーーーーーー

雄二は改めて睡の肉体に見惚れていた。

こうしてベッドに仰向けになっても、重力に抗い続ける巨乳。細いくびれにエロすぎるヒップライン。どこも垂涎もののワガママボディだ。

そんな美女の上にのしかかりながら、雄二は今から彼女に挿入しようとしていた。

童貞卒業である。

「ん、ここよ……♡♡」

睡が亀頭の位置を合わせると、雄二の股間に甘い刺激が走る。

ここがおまんこの入り口。腰を突き出すと、淫らな淫肉がちんぽを飲み込もうとしてくる。雄二は逆らう事はせずに、ぬぷぬぷと腰を押し進めていった。

「ぁ……ふ、太い……♡♡♡」

睡の表情が大きく歪む。雄二の巨根は長さ太さ共に規格外な大きさをしていて、先端が顔を埋めただけでも息苦しさを感じていた。

そのまま、かちかちのペニスが押し込まれる。めりめりと膣を強引に拡張しながら、媚肉を巻き込んで奥へと潜り込んでくる。

ペットボトルにも届きそうなサイズの肉棒に、睡は年上の余裕など容易く吹き飛ばされてしまっていた。この子をリードしてあげるという雌の喜びは限りなく達成不可能で、今すでに身体は完全に屈服していた。早くこの雄に種付けされたいと、全身が震えていた。

「ん、ほぉぉっ……♡♡♡」

ようやく三分の二が入った辺りで、既に膣内は巨大な肉棒でパンパンだった。みっちりと隙間を埋めるようにして刺さった陰茎に、睡は早くも軽い絶頂を重ねながら、呼吸を浅くしていた。

大きすぎる肉棒の脈動が、手に取るように分かる。浮き彫りになったごつごつの血管が、睡の体内を深く貫いていた。

雄二のペニスは止まらなかった。

「睡さんに、全部いれたい……」

「ま、待ってそれ以上はっ……あはぁぁっん……！♡♡♡」

許容量を超えた剛直が、無理に侵入してくる。

睡は子宮ごと押し上げられてアクメを決めながら、命の危機を感じるほどの巨根に背筋をゾクゾクさせていた。

「こ、これぇ……しゅきぃ……♡♡♡」

危なげな視線で天井を見上げながら、興奮とスリルが混ざり合ったエクスタシーで気がどうにかなりそうになっていた。

まるで力押しで圧縮されるようにして無遠慮に子宮を押し潰しながら、長大なペニスが睡の体内に入ってくる。根元まで本当に入れる気かと確認するまでもなく、雄二はその勢いのままずぷんと挿入し切った。

「く、ひぃぃっ……♡♡♡」

お腹をぽっこりと肉棒の形に膨らませた睡は、なんとか全て飲み込めた安心感からか容易く絶頂する。噛み締めた歯の間からよだれをこぼし、定まらない目つきであちこち

に視線を走らせる。

一方、収縮を繰り返しちんぽを締め付けてくる膣に雄二は堪えながら、荒い息のままおっぱいの谷間に顔を埋めた。

「睡、さん……」

「はぁ、はぁ……雄二くん……♡♡」

とろんとした目で、お互いを見つめ合う。

とてつもない安堵感に包まれて、二人はくすりと笑みをこぼした。二人の意識は、徐々に混濁して一つになりつつあった。

睡はこんなのに犯されたら間違いなく死ぬな、とどこか他人事のように思いながら、ゴーサインを出すように頷いた。

雄二は頷き返すと、ゆっくりと腰を動かし始める。

「ッぅ……!!?♡♡♡♡」

入るだけでも一苦労だった巨チンが、外側に這い出るように動き出した。膣内が悲鳴を上げて、少しでも動きを滑らかにしようと多量の愛液を垂れ流す。

徐々に膣から出て行く肉竿。お腹の膨らみもそれにつれて元の美しい形に戻っていく。

熱すぎるくらいの熱棒が消え、そして勢いよく差し込まれた。

「ふぐぅっ……!?!♡♡♡♡」

どちゃっ、とおまんこを押し潰すような勢いの一突き。肺から酸素を押し出されて、か細く喘ぐ睡。

「睡さんっ、好きっ……好きだよっ……!!」

想い人と一つになった少年は、その瞬間暴走を始めた。

「が、っ、はぁっ……!!!♡♡♡」

太い腕のようなペニスが、高速の腰使いで出たり入ったり。雄二は身体全体を反らしながら、美女の肉体に逸物を連打する。

一往復だけでも何度絶頂したのか分からない女殺しが、睡の身体を何度も貫いていた。

「いっ、いぐっ、いぎじぬぅっ……!♡♡　おちんちんに殺されるぅっっ、ぅぁっ……!!♡♡♡」

普段からは想像も出来ないような声を上げて、睡はアヘ顔のまま地獄のようなエクスタシーに導かれた。

気遣いも何もあったものではない、若さ任せの全力ピストン。相手が睡である事がそんなに興奮するのか、雄二は獣のような唸り声で腰を振りたくっていた。

肉のぶつかり合う音と、ベッドの軋む音が、やけに部屋に響く。

絶頂しても、絶頂しても、終わりのないちんぽ地獄。睡は雄二の頭を抱きしめながら、よがり狂う事しか出来なかった。

「おっ、おっ、いぐぅっ、またいぐぅっ♡♡♡　イキすぎてだめになるぅっ♡♡♡♡」

雄二はそんな声を聞いて更に腰を力ませながら、ぎゅっと細い腰を抱きしめて睡を愛し続ける。顔に当たるぽよぽよとした乳肉に頬を押し付けながら、子孫繁栄の本能を爆発させてとにかく犯しまくる。

そんな雄二の想いが、個性を更に強化する。睡の膣を最も効率よく感じさせるためにカリ首が肥大化し、先端からは媚薬の成分によく似た体液を垂れ流し始める。

腰回りの筋力も増強され、中学生とは思えない迫力で、渾身の一突きを放つ。

「あひぃぃぃっ♡♡♡　なにこれなにこれぇっ♡♡♡　おちんちん気持ち良すぎるぅっっっ♡♡♡」

睡は弓なりに背中を反らして、アクメにアクメを重ねた。絶頂まんこからはじょろじょろと絶え間ない潮吹きが止まらない。

女を絶頂させるためだけに成長した雄二のペニスは、睡を完全に雌落ちさせていた。

そうなれば、雄二の目的は次に向かう。

大好きな人を犯した後は、大好きな人を孕ませる。

「睡さんっ、出るっ……！」

どすどすと杭打ちピストンで尻を弾ませながら、雄二は睡に限界を告白した。
「いいっ♡♡　そのまま、ぁんっ、だし、だしてぇっ♡♡♡♡　孕ませちんぽぉっ、思いっきり吐き出してぇっ♡♡♡♡♡」
睡が両手両足を使い、雄二の身体を抱きしめた。
雄二は女体に密着される多福感にニヤつきながら、トドメとばかりに子宮口を押しつぶした。
「睡さん……!!」
「おっ、ほぉぉぉぉぉっっ……!!♡♡♡♡♡」
肉棒の先端が爆ぜて、雌を孕ませようと暴力的なまでの精子が睡の子宮に襲いかかった。
卵巣ごと犯す勢いで、性の濁流が膣内を満たしていく。ごぷぷ、と膣内のスペースに限界が訪れ、間欠泉のようにちんぽの刺さった穴から白濁液が吹き出す。
睡は総身を波打たせて、失神寸前の絶頂を味わっていた。子宮が精子に溺れて、身体が雄二を主人と認めてしまう。
「睡さん、睡さん……」
苦悶の声すら漏れるエクスタシーだが、今乳房に必死にしがみつきながらへこへこと腰を振る雄二には愛おしさしか感じない。

びゅうびゅうと尚も射精を続ける雄二を撫でながら、睡は何度目か分からない絶頂に意識を持っていかれた。

ミッドナイト４

「ただいま、睡さん」
玄関で靴を脱ぎ捨てると、雄二は一目散にリビングに向かった。
「おかえりなさい、雄二くん。早かったわね」
ソファに腰掛ける睡は、首だけ振り向いて手をひらひらさせた。
それに頷きながら、テーブルに着替えの詰め込んだリュックを置いて睡の元へと近づく。
雄二は睡の家に泊まる準備をするために一度自宅に帰っていたのだ。それはこの週末、睡の家で過ごす事を意味している。
初体験の雄二が正気を取り戻すのは日がすっかり落ちた後だった。二人とも互いにもっとセックスを続けていたかったが、睡が「これ以上は親御さんが心配するかもしれない」と雄二に言い聞かせて泣く泣く肉棒を膣から引き抜いた。
それでも雄二は、大好きなミッドナイトと甘い一夜を過ごしたいと睡に抱きつき、窒息寸前のディープキスを幾度と繰り返した。もっこりさせた腰をこすりつけながらそんな事をされれば、雌落ちした睡が断れる筈もなく子宮を疼かせながら了承した。

だが、良識ある大人として、雄二の両親には許可を取る必要がある。睡は雄二を連れて、彼の自宅のインターホンを鳴らした。

独身女性が、昨日会ったばかりの男子中学生を家に泊める。胡散臭い話だ、断られるに決まっている。そうなれば、残念ながら諦めるしかない。

そんな睡の考えはあっさりと覆された。

「あらそう！　良かったわ、これからウチの息子と仲良くしてくださいね」

「え……？」

聞けば雄二の家は共働きで、両親不在の日も多いという。

その為、日頃から一人で家に居たり、或いは友達の家にお泊まりさせてもらう機会の多い雄二。母親としてもお隣さんに泊めてもらっていると知っていれば、少しは安心できるという話だそうだ。

色々と言いたい事も多かったが、睡はその言葉を飲み込んだ。

そうやすやすと家庭の事情に踏み込んでいいのか分からないし、当の雄二は別段その事を不満と感じている訳でもなさそうだからだ。

そして何より、お許しが出た。

雄二を家に泊めていいと。

睡はそれだけで天にも昇るような気待ちだった。

後はとんとん拍子で話が進んだ。雄二は手慣れた様子で泊まりの準備を行い、睡は時間が掛かるから待っていてくれ、と帰されたのだ。

「はい、おかえりのおっぱいよ……♡」

当然のように全裸の睡が、惜しげも無く巨乳を晒して手を広げている。

雄二は隣に座ると、躊躇いなくその幸せに飛び込む。鼻が乳肉に押し潰されて幸福な息苦しさを味わった。

その間に、睡は雄二の腰に手を伸ばし、かちゃかちゃとベルトを外しにかかる。

「お尻、上げてくれる？」と耳元で囁かれ、その通りにすると即座に下半身を丸出しにされる。

途端に雄臭いちんぽ臭が広がった。

「んー……♡♡」

睡が目を閉じて大きく鼻から空気を吸い込んだみせた。同時に脚を擦り合わせて、股座の辺りをもぞもぞさせる。

雄二はその様子を横目で観察して、徐々に自分の肉体が普通ではないと気がつきながら、目の前のピンク色の突起を舐めた。

「あんっ……♡♡」

睡が、気持ちよさそうに目を細める。

自然とおっぱいに両手が向かい、たぷんと持ち上げるように揉む。
熱っぽい睡の吐息を近くに感じながら、乳輪の上にぷっくり膨らんだ乳首を口に含む。
「んふ、美味しい？♡♡」
我が子をあやすように、雄二の髪を撫で付けてくる。
雄二はちゅぱちゅぱと音を鳴らして乳首をしゃぶりながら、うんうんと大袈裟に頷いた。
彼女は嬉しそうに顔を綻ばせ、もっと吸ってと乳房を押し付けてくる。
うっすらとミルクの匂いのする乳肌に顔を覆われながら、雄二は幸せのあまり目を閉じていた。
あのミッドナイトのおっぱい。それにこれから、土日の間、彼女の身体を好き放題できる。
一瞬ヒーロー活動はどうするんだろうと脳裏をよぎったが、すぐに首を振って打ち消した。
彼女はミッドナイトである以前に、香山睡という、自分だけのヒーローなのだ。
「睡さんのおっぱいは、僕だけのものだからね」
「もちろんよ、ほらもっとちゅぱちゅぱ吸って……♡♡」

ちんぽから、離れられないように、この土日で教え込む。
雄二はその目標のためにどんな事でもするつもりだった。
とろりと、彼のペニスの先から、個性によって生成された媚薬入りの我慢汁が垂れた。

ーーーーーーーーー

個性「子孫繁栄」。
あれから何日か経って、睡が紹介してきた病院に行ったところ、雄二の個性が発見された。
雄二自身、睡とセックスしまくる日常の中で思うところがあったので、この結果にはやっぱりかと既知感に似た感情を抱いた。
その能力は、性欲という一点に渡って非常に強力だ。男性器の増強、それに伴う全身の筋肉の強化。体液媚薬化。女性のみを魅了するフェロモン、それに臭い。近くにいるだけでも、女性の身体を刺激して、興奮しやすくする等。他にもまだ隠された能力があ

るのかもしれない。
「しかし、一歩間違えればとても危険な個性だ。しかも判別するのは困難……ミッドナイト、よく見つけたね」
「あー、あはは……」
まさか自分がその毒牙にかかったとは言えず、睡は言葉を濁していた。
雄二はそんな彼女の様子を盗み見つつ、目の前の医師に疑問をぶつけた。
「危険って、どういうことですか……?」
「そりゃあ、君みたいな思春期の子がこんな力、性犯罪なんかに……おっと」
不用心にも最悪の可能性の一つを口にしてしまう医師。そんな彼と、それを聞いていた睡に緊張が走る。
実際、彼の個性ならば容易く可能なのだ。
「雄二くん……」
そんな事を彼が考え出したら、自分は止められるだろうか。
そんな睡の不安げな声に、しかし雄二は明るく医師の言葉を否定した。
「ありえないですよ。僕ミッドナイト一筋ですから」
「……いや、18禁ヒーローに恋してるのは、それはそれで後々危なそうだけど」
それでも医師は雄二の目を見て何か確信したらしく、「君なら大丈夫そうだね」と苦笑

しながら後ろで顔を真っ赤にした睡を見つめた。
こくりと頷き返す睡に、医師は雄二の頭をぽんと撫でた。
「ありがとうございました」
診察室を後にすると、雄二は睡と手を繋いで病院を出た。
日差しが眩しい街道を、二人並んで仲良く歩く。
睡は何か考え事をしているのか、心ここに在らずといった様子だ。
そんな彼女が口を開いたのは、病院からかなり歩いた場所だった。
「雄二くん、先に言っておこうと思うけど」
「個性の事？」
睡は頷き、立ち止まった。
「君の個性の力で、私は君の事を好きになった。きっかけは確かにそうかもしれない。でも勘違いしないで欲しいの、私は君の個性を好きになったんじゃなくて、紛れもなく、個性を含めて雄二くん、貴方を好きになったの。だから……」
「大丈夫、分かってるよ。さっきも言ったけど、僕は睡さん一筋だから」
「……そう」
安堵のため息をつきながら、睡は嬉しそうに雄二と目線を合わせた。
「私も、雄二くん一筋よ♡」

ほっぺにちゅっとキスをされる。
雄二はにへへ、と頬を緩めながら、再び手を繋いで家路を進んだ。
「……あれ、雄二くん？」
そんな時、すれ違いざまに声を掛けてくる人影があった。
その聞き覚えのある声に、振り向くと、やはり覚えのある人だった。
「あ、光己さん」
「やっぱり。久しぶり」
雄二の目の前に、睡と引けを取らないプロポーションの持ち主が現れた。
ツンツンの金髪に、負けん気の強そうなルックス。
すらりと高い身長に、脚線美を露わにしたホットパンツ。胸元を大きく膨らませて、パツパツのシャツを着ていた。
睡に負けず劣らずの、超美人だった。
快活な笑みを浮かべた彼女は、隣の睡を見て眉根を寄せながら、視線だけで「誰？」と訪ねてくる。
「お隣さん。お母さん達はほら、いつもの」
「あー、それで。なによー、言ってくれればおばさん面倒みたのに」
ガシガシと乱雑に頭を撫でられる。

「えっと、香山睡です……？」
状況がよく飲み込めないまま自己紹介をする睡。
「あ、ごめんなさいね。私、爆轟光己。雄二くんとは、息子が仲良くて、よくウチに泊まってもらってたのよ」
「いや、僕が泊まらせてもらってたんだ。ほんと、ありがとうございます……」
「いいのいいの、アイツも喜んでたし……にしても雄二くんは良い子ねぇ、息子交換したいわぁ……」
そんな事を言いながら腰を屈めると、手慣れた動きで雄二の頭部を抱きしめる。
むにむにと下着のつけていない乳房の感触が、布越しに顔面に伝わった。
「じゃ。またね」
しばらくもしゃもしゃと雄二を抱きしめていたが、やがて気が済んだのか唐突に背を向けて歩き出す光己。
「あ、はい」と完全に呆気にとられた対応の睡。
「光己さん……」
雄二はというと、ふりふりと形のいいお尻を左右に振って歩く幼馴染の母に目を奪われていた。
身体の芯に潜む何かが、彼女を欲していた。

撫でられるのも、おっぱいを押し付けられるのもいつものことだ。
けれど、勃起したのは初めてだ。

『犯せ、犯せ』

「っ……！」
雄二は首を振ると、睡の手を取った。
「あ、ちょっと、雄二くん……？」

爆豪光己１

「ババア、今日雄二泊まるぞ」
荒々しく玄関を開けると、彼は開口一番そんな言葉を大きく発した。
「ほら、入れよ」
「あ、うん。お邪魔します」
雄二はいつものリュックを持って、靴を脱ぐ。もはや雄二専用のスペースがある靴棚に仕舞うと、背後からとととと、階段を降りる音がした。
「勝己ィ、あんたまたババアって……!!　あ、雄二くん、いらっしゃい。お部屋、いつものところで良いわよね？」
振り返ると、そこには爆豪光己の姿があった。部屋着といえど女体のラインがはっきり浮き出る衣服の彼女は、やっぱり誰が見ても美人だろう。
「あそこしかねェだろ、アホが。まさかババアの部屋に泊まるってか？」
「それも良いわね……どう、おばさんと一緒におねんねしてみない？　勝己なんかよりよっぽど可愛げのある雄二くんなら歓迎よ」
「死ね。行くぞ雄二」

「あ、うん……光己さん、じゃあそういう事で」
「うん、今日は美味しいご飯作ってあげるからね」
「ありがとうございます」
雄二は光己に手を振って別れると、彼に導かれるまま部屋に入る。今日も本当なら睡の家で過ごすつもりだったが、彼女は絶賛ヒーロー活動中だったので仕方なく諦めたのだ。
「んふふー、何作ろっかなー……♪」
二人とも、もはや雄二が泊まる事には慣れたものだった。今や雄二用に空いている部屋が用意されているし、いつ来てもいいように食材も買い溜めしてあるらしい。それほど頻繁に雄二はこの家に泊まりに来ていた。
本当に、頭が上がらない。いつかこの恩は返さないと、と思いつつ、雄二はリュックを置いた。
「先週、何してたんだ？　ババアが心配してうるさかったんだぞ」
「ちょっと色々あって。連絡すれば良かったね、ごめん――かっちゃん」
爆豪勝己。あの光己の一人息子で、雄二とは幼稚園より前からの仲であり、所謂幼馴染である。
家庭の事情により一人になる事が多かった雄二を、爆豪一家は快く受け入れてくれ

た。彼は雄二を一人にしたくないと、双方の両親に頭を下げて、五歳児にもかかわらず大人達に宿泊を許可させたのだ。

そんな事もあって、雄二はここに宿泊する事が当たり前のようになっていた。

だから雄二は、この口の悪い幼馴染を心から信頼している。

孤独。そして無個性だった雄二に対するいじめ。そう言ったものから、彼は守ってくれた。守り続けてくれた。

彼は、まだヒーローではないが、雄二にとってはあのミッドナイトよりも以前から応援している、自分だけのヒーローだった。

「早い話が、僕に個性が見つかったんだよね」

雄二はどう説明するべきかと頭を掻きながら、勝己を見つめてそう言った。

「あァン……？」

一方の勝己は何を言われたのか理解できない様子で、首を傾げていた。

しかし徐々にその意味を理解しだすと、大きく目を見開いて、ぽかんと口を開けた。

「お前……マジか……？」

「うん、そうみたい……まだよくわかんないけど」

勝己は天井を見上げると、笑い声を上げた。

「はは、ははは、そうか、良かったな……って、お前は別に個性欲しがってなかったか」

「あのクソデクと違ってな」と面白くなさそうに唇を尖らせながら、勝己はそれでも笑顔を見せていた。
「うん、そう。でももしかしたら、これでかっちゃんと二人で――」
――ヒーローになれるかも。
「ま、安心しろよ。個性があろうと無かろうと、俺が守ってやるから」
「……うん」
雄二の声は小さく消えた。
個性を手に入れたと報告しても、未だ彼の中では雄二は守るべき存在なのだろう。
今まではそれが嬉しかったが。ふと何気無く二人でヒーローになるなどと口走りそうになって、自分でも気がついてしまった。
自分の中でどこか神格化していた彼と、対等になれるかも。
そう思ってしまった。
けれど勝己にそう言われては、雄二は素直に頷くしかなかった。
自分はやはり、弱い人間だ。
結局、彼と対等になれるのは、彼しかいないのだ。
雄二と同じく無個性だったにもかかわらず、常に彼のとなりに立ち続けた、あの緑色の少年しか。

「なんの話してんの？」
「うわ」
突然、幸せな膨らみが後頭部に押し付けられる。
真上から光己の声が聞こえると、そのままぬいぐるみのように抱きしめられる。
「おいこらババア、何勝手に入ってきたんだコラぁ!!?」
「いいでしょ別に。私だって雄二くんと話したいんだからー」
「バッ……歳を考えろよ、ババアと話なんか合うわけねェだろ!!」
光己は勝己の言葉を聞き流しながら、「そんな事無いわよねー？」と覗き込むように目線を合わせてくる。
ムチムチの女体が、無警戒で密着してくる。
「は、はい、光己さん……あと、ちか、近いです……」
睡を抱いた事で女の味を知ってしまった雄二。今までは気にならなかった光己の乳房の感触に、興奮を抑えきれなかった。
『犯せ、犯せ――全てを、犯せ』
「く……うっ……」

頭に響く、力強い声。
まただ。また。
またこの声だ。
我慢出来ない。
この間も、光己と別れた後、我慢出来なくなって睡に激しく発散した。
光己を見ると、興奮か抑えられないのだ。
「やば……」
むにゅむにゅと押し付けられる巨乳に、雄二は勃起してしまっていた。
「だいたい、雄二は優しいから言わないだけで――」
「はぁ？　こら息子、調子乗ってると――」
二人は尚も言い争っている。
今のうちにトイレにでも行って、少しでも性欲を抑えないと。個性を抑えないと。
「と、トイレ……！」
雄二は逃げ出すように部屋を出ると、勝手知ったる爆轟家の廊下を歩いてトイレに駆け込む。
もはやズボンの上からでもはっきり分かる程度に勃起している。急いで脱いで、男根を外に晒す。

その瞬間、閉じ込められていた悪臭が解き放たれた。睡曰く、女には決して逆らえない暴力的なちんぽの臭い。電車の中等で放てば、テロに匹敵するような魔性の香りらしい。

正直雄二自身が嗅いだところでちんぽ臭いだけなのだが、今は問題じゃない。

とにかく、これを光己に嗅がせる訳にはいかない。そして見せる訳にもいかない。ただでさえ雄二は中学生で、女性と行為に及ぶのは危険な事なのに。

それに、何より光己は息子の勝己を見れば分かる通り、子持ちだ。人妻だ。二重の意味でマズイ。

もし彼女がこれを嗅いで、興奮のあまり雄二を押し倒してきたら。ルックスだけ見れば大歓迎ではあるが、前述したようにあってはならない事だった。

「はぁ、はぁ……と、とりあえず、小さくしないと」

雄二は両手で握っても収まりきらない巨根の根元を持つと、ぎこちない動作で扱き始めた。

精子の量も大変だが、便器に直接流し込めば問題ないだろう。

あとは、出すだけ。

「光己さん……光己さん……！」

おっぱいの感触を思い返しながら、懸命にちんぽを扱く。我慢汁が便器の中に垂れる

たびに、個室の中にフェロモンが充満していく。
もしこの中に睡が居れば、恐らく呼吸するだけで絶頂するだろう。オナニーを続ければ続けるほど、濃度は濃くなっていった。
もちろんこれは臭いだけじゃない。雄二はこれが個性によるものだと感じ取っていた。
早く、早く処理しないと。そして換気の時間も設けなければ。光己が嗅いでしまったら終わりだ。
あまり長時間は掛けられない。長引けば心配されてしまうかもしれない。
そんな焦りが、雄二の視野を狭めていた。
「ねぇ、雄二くん……♡♡♡」
だから雄二は、扉を開けて背後に立つ光己に、気付くのが遅れた。

爆豪光己２

「ぢゅるっ、ぢゅるるっ、んむっ、ちゅっ……♡♡」

便座に座らせた雄二のペニスを、光己は一心不乱に舐めていた。

彼女は同時に右手で自分の大きな胸を揉み、左手は股の間に突っ込んでくちゅくちゅと音を鳴らしている。服などとうに脱ぎ捨てていて、今彼女が身につけているのは黒いパンティのみだ。

「あ、だっ、だめです、光己さん……！」

激しいフェラチオに呻きながら、なんとか彼女を止めようとする雄二。けれど舐められるたびに肉棒からフェロモンたっぷりの悪臭が広がり、個室のちんぽ臭の効果をより高めていた。しかも先ほどとは違い、光己の手によって鍵を閉められたここは完全に密室だった。上がり続ける濃度に、光己は股座からどばどば愛液垂らしていた。

「素敵……素敵よ、雄二くん……♡♡　れろ、はぷっ……♡♡♡」

光己は鼻を肉竿に乗せてなぞるようにちんぽ臭を嗅ぎながら、何度もしつこく媚薬化したカウパーを舐めとって飲み込んでいく。

いつも明るく元気な光己の姿はもうどこにもなく、今雄二の目の前にいるのは一匹の

雌だった。

正直、こうなるとどうしようもないのだ。個性のコントロールはまだ不可能で、睡がこの状態になると五時間はちんぽを舐めて挿れて挟まないと欲情が治らないのだ。

言うなれば、「強制発情」。

そしてこれは、同時に雄二にも適応されてしまう。意思とは関係なしに。

「光己さん、気持ちいい……」

「雄二くん♡　もっとおちんちん感じてね……♡♡」

次第に理性が薄れて、光己とセックスする事に抵抗が無くなる。

むしろヤリまくりたいとすら思いながら、肉棒を最大まで勃起させる。

長くて太い、雄二の個性が、ついに本性を現した。

「なにこれ……♡♡♡」

先程からその大きさに目を見開いていた光己だが、こうして雌の奉仕を受けて膨らんだ巨根ははっきり言って異常な大きさだ。パンパンに張ったカリ首に、根元まで太巻きみたいに伸びた肉竿。おまけに両手でやっと包み込めるかどうかという特大サイズの金玉。

光己はぶるっと肩を震えさせると、舌を伸ばして裏筋を舐め出した。

「雄二くんの、デカチンポ……♡♡　くっさいちんぽ臭に鼻ごと犯されながら、舐めるだ

けでおまんこ疼いちゃう……♡♡♡」

そう言って、手早くパンティを脱ぐ彼女。その布地の前面には、べっとりと彼女の興奮状態を表す愛液が満遍なく付着してシミになっている。

びくん、びくんと震えるペニスをよしよしと撫でながら、光己はそのパンティを雄二の顔面に押し付けた。

「うう……」

べちゃりと押し付けられた布地は、マン汁でびちょびちょになって凄まじい臭いだった。発情しきった人妻のすけべな臭いに、雄二は鼻をピクつかせながらビンビンに男根を反り返らせていた。

「あっは、マン汁パンティでこんなにしちゃって♡　雄二くんは変態ね♡♡」

人の悪そうな笑みを浮かべた光己は、雄二の膝の上に脚を開いて乗ると、抱きしめてきた。

「むぐぅ……」

パンティごと、顔面がおっぱいに包まれる。

いつものスキンシップではなく、雄二に乳房の柔らかさを味あわせるような、いやらしいデカパイ奉仕だった。

同時に、距離を詰めてきた彼女のお腹に、巨根の裏筋がぴとりとくっ付いた。光己は

痴女のような振る舞いで乳房を雄二に押し付けながら、はっきりと体温を感じ取れるほど密着してくる。

むっちりした肢体が、触手のように絡みついて、雄二はあっという間に最後の理性を放棄した。

「挿れるわね……♡♡」

光己は抵抗なく男子中学生を犯そうとしていた。ありえないくらいのサイズのペニスをおまんこに咥え込んでは、ぬぷぬぷと腰を沈めてくる。

「光己さんの、おまんこ……ぁっ、ちんちんとける……」

ねっとりとした感触が、先端から肉棒を包み込んで行く。雄二はパイ揉みを繰り返しながら、腰をカクカク震わせてなんとか光己の膣圧に耐えようとしていた。

規格外のペニスでは、誰の膣であれ締め付けは最高だ。それほどまで太く、大きいのだから、膣のサイズを問わず無理やり巨根サイズに拡張してしまう。

「ん、んふぁぁ……♡♡♡♡」

身体の中心から裂けるような陰茎に、光己は舌を突き出しながら、下品な表情で身を逸らした。勝己を産んでからというもの、暫く振りのセックスの相手がこんな人外ペニスでは、到底耐え切れるはずもなかった。

雄二がクイと腰を動かすと、それだけで全身に電流が走ったような感覚が流れて、脚

の力が抜けてしまう。
「おっ、ほぉっ……!?♡♡♡」
爪先立ちで調整されていた挿入が、一気に終わる。
どちゅん、と根元まで雄二のペニスが差し込まれ、光己は膣をぎゅっと痙攣させた。
とぷりと溢れ出す媚薬カウパーが子宮口に擦り付けられる。一瞬の鋭い痛みは、次の瞬間には鈍化し、甘い快楽へと変換されていた。
「いぐぅ……♡♡♡」
光己は一刺しでエクスタシーを迎えた。
ガニ股に開いた脚を痙攣させて、きゅんきゅんとおまんこを締め付ける。
雄二を抱きしめる力も強くなり、更に乳肉の海に顔を押し込まれた。
「はぁ、はぁ……!」
今や邪魔でしかないパンティを掴んで投げ捨てると、雄二はみっちりと乳肉の詰まった豊乳を揉みしだく。
いつも目にしていた、光己のおっぱい。こうして直に触れてみると、あまりの弾力と柔らかさに夢中になってしまう。
五指が沈み込むようにしていやらしい肉球に食い込む。引きちぎるみたいにして引き伸ばして、たっぷたっぷと心地いい重量感を味わう。

「あはぁっ、おっぱい気持ちいいっ……♡♡　息子の友達に犯されながら揉み揉みされるの気持ちよすぎるぅっ……♡♡♡」

光己はそんな事を蕩けた声で叫びながら、ヒップを弾ませていた。

何度も絶頂を重ねながら、貪欲に雄を求めて膣壁が蠢く。こんな巨根を刺したままで我慢出来る訳がないと、すけべ過ぎるおまんこを奮い立たせて、長いストロークを往復させる。

「光己さんのえろまんこ……すごい、気持ち、いい……！」

巨根をものともしない、淫乱まんこの上下運動。

人妻の性欲のタガが外れて、光己は雄二の男根を咥え込んで離さない。窮屈な締め付けの上に、ぬめぬめのいやらしい膣壁が肉棒の隅々を舐めしゃぶってくる。

お尻を弾ませて、時々ひねりを加えるように腰を捻らせてちんぽを犯す光己。あまりの多幸感に雄二は胸の谷間の中で頬を緩める。

「ちんぽっ、ちんぽぉっ……♡♡♡　息子の友達ちんぽに、おまんこ気持ちよくさせられちゃってるぅっ……♡♡♡」

口ではそう言いつつも、腰使いは依然として激しいままだ。雄二の個性によって雌にさせられた光己は、孕む気満々のエロピストンで、まんこを上下させる。開ききったラビアが巨根を咥えたまま、生き物のようにうごめいていた。

「光己さんっ、そろそろ出るぅ……！」

もともと自分で処理しようと、速度を優先した雑なオナニーで耐久力を無くしていた雄二。彼女を止められないまま今に至り、まさに最上級の雌まんこにしゃぶり尽くされては、我慢など不可能だった。

便座の上にでんと乗った玉袋の中が、種付けの予兆を見せるようにぎゅっと小さくなる。どくどくと心臓のように激しい鼓動を肉棒全体が発し、カウパーの量が明らかに増えていった。

「いいわよ、雄二くんのデカチンポぉっ♡♡　おばさんの中にどっぷどっぷ吐き出してぇっ♡♡♡　愛してるわっ、はむ……ちゅっ……♡♡♡」

乳肉で溺れた雄二の顔を上に向けると、光己は噛み付くように唇に吸い付いてきた。

唾液を多量にまとった舌が、互いの口の中に出入りする。興奮の最高潮に達した二人は、何度も高速で唾液を行き交わせて、それと似たような速度で腰をぶつけ合った。

「れろ、はぷ、んっ……み、みちゅきさんっ……♡♡♡」

「あんっ、ちゅむ、ちゅっ……んんぅ、らひてぇ、ちんぽ汁ぜんぶ流し込んでぇっ……♡♡♡」

恋人同士のように甘く見つめ合いながら、雄二はどすんと膣奥にペニスを突き立てると、ぷりぷりの瑞々しいお尻を掴んで逃さないように拘束した。

そのまま、雄の性欲にまみれた種付け射精が、始まった。

「おほぉぉぉっっ♡♡♡♡」

どびゅっ、びゅう、びゅるるるるっ。

白く濁った雄汁が、勢いよく子宮の入り口に吐き出された。

ただでさえ巨根に押しつぶされて降参するような形になっていた子宮は、無理やり犯されるようにその入り口に大量の精子を流し込まれてしまう。

膣痙攣を起こしたように膣全体が大きく震え、痛いくらいに締め付けてくる。止まることのない射精ちんぽに更にしがみついては、もっと性を吐き出せとマン肉で扱いてくる。

光己は雄二を強く抱きしめながら、ぷしゅぷしゅと潮をおまんこから飛ばして白目をむいていた。

「はぁ、はぁ……」

雄二の長い射精は、光己の体内が白濁液で満タンになるまでたっぷりと行われた。

その間、絶頂を続けていた光己は、ちゅむちゅむと雄二との甘いキスを楽しみながら、ぼそりと呟いた。

「今日はおばさんと一緒に寝ましょう……♡♡」

その日の夜、明け方近くまで二人のセックスは続いた。

ミッドナイト&爆豪光己1

「個性の制御……？」

雄二の股に顔を埋めていた睡は、彼の言葉に眉をひそめながら肉棒を口から抜き取った。

亀頭からぼたぼたと垂れる精液を指で拭いながら、二人は話し合うためにお互いをぎゅっと抱きしめた。鼻が触れ合うほど顔を近づけて、舌を絡める。

睡に押し倒されるように、雄二は仰向けになった。

「ちゅっ、んっ……ぷは……ほら、あんな事になっちゃったしさ」

「そうねぇ……」

ソファに倒れながら指差した先には、キッチンでフライパンを手にした光己の姿があった。

ここは睡の家である。それなのに彼女はまるで自宅のようにテキパキと調理しながら、楽しそうに鼻歌を歌っていた。

その姿は何故か裸エプロンで、フリルのついた白エプロンを着ているがその中はナイスバディの美女である。横から見れば圧巻の横乳やら揉みしだきたくなるような尻肉

が丸見えだった。
「まぁ、いいんじゃないかしら？　本人も楽しそうだし」
あっけらかんと睡は答えるが、雄二はそれもそうかと頷く気にはなれなかった。
「でも……」
やってる事は最低なのだ。
人妻に手を出して、その上ほかの女性を犯しながらその人妻に飯を作らせている。中学生の雄二でもわかる、クズだ。
睡は暗い顔をする雄二を見て、安心させるように微笑んだ。
「それに今更でしょう。もう光己さんが雄二くん目当てで来るようになって、二週間は経つわよ」
睡はそう言って笑うと、くいくいとマン毛の辺りをペニスの裏筋に押し付けてきた。
「それなのに、雄二くんのここは、そんな彼女を拒まず、むしろ私と仲良くお尻を並べさせてどぴゅどぴゅしたでしょう？♡　それが君の望みなら、私は止めないわよ」
「……正直、二人とエッチできる今が幸せで、睡さんとも光己さんとも離れたくありません」
雄二がそう告白すると、睡は「うむ、素直でよろしい」と大仰に頷いた。
「私達は君の雌になっちゃったから、十分幸せよ♡　気にしないでいいから、思う存分犯

してちょうだい♡♡」
「……ま、まぁ、えと……で、でも光己さんとは関係なく、個性の制御は出来るようにしたいんです」
その言葉にグラっときた雄二だったが、今回はなんとか理性が勝った。
光己の時のように、興奮が抑えられなくなって、流れるまま犯してしまう、という事件はもう起こしたくないのだ。まだ光己だったからこそ、特に問題は起こっていないが、これが赤の他人に被害が出た場合、悲惨なことになるだろう。
場合によっては、雄二の社会的地位も危うい。
睡もその点については同意らしく、珍しく神妙な表情で頷いていた。
「なになに、なんの話？」
「雄二くんの個性について、ね」
いつのまにか調理がひと段落したのか、光己がエプロンを脱いで近づいていた。
彼女が裸エプロンなのは、何も雄二の趣味に合わせて着用していた訳ではない。
「はい、雄二くんの好きなおっぱい♡　料理の間吸えなくて寂しかったでしょ？♡♡♡」
「光己さんのおっぱい……はぷ……れろぉ、れる……」
ソファの横に座り込んだ光己が、差し出すように雄二に乳房を向けてきた。尖った乳

首に、乳房に対して少し大きめの乳輪。雄二は我慢出来ずに顔面を押し付けた。
彼女の裸エプロンの理由は、単純に、調理の後すぐにセックスが出来るからである。乳も舐められるし、おまんこにも挿入出来る。挿入している時間の方が長いこの家の中では、服を着る方がありえない選択肢というのが三人の共通認識である。
それほどまでに、ここは怠惰で淫猥な空間になっていた。
「んふ、可愛い……♡♡　おちんちんはあんなに凶暴なのにねぇ……♡♡♡」
光己は雄二の頭を撫でながら、必死に乳首にしゃぶりつく彼の口元を見て微笑んでいた。
一方の睡はそんな雄二の身体を舐め回していた。乳首を舐め、首元を舐め、そして、耳元を唾液たっぷりの舌でねちっこく舐め上げる。
そのまま、ささやくような声量で、呟く。
「結局、個性を使いこなすには一つしかないのよね……」
「ちゅぱっ……どうやって制御するの？」
「とにかく使いまくるのよ♡♡♡」
睡はにひ、と口角を持ち上げながらそう言った。
「雄二くん、このおちんぽを使いこなしたいなら、とにかくセックスしまくるしかないわ。これは雄英式よ♡♡」

「あら、それならおばさんも協力出来そうね♡♡♡」
美女二人はそういうと、劣情を催した瞳で雄二を見つめる。
雄二はごくりと唾を飲み込みながら、股間の逸物を硬く膨らませた。

――――――

「とは言ったものの……れろぉ……雄二くんの個性なら毎日……ちゅっ……限界まで酷使してるわよねぇ……♡」
「私達どっちかのおまんこには……ちゅむ、ちゅ……絶対に入ってるし……♡」
「う、うぅ……」
美女二人に挟み込まれた雄二は、左右からちんぽを扱かれながら乳首責めを受けていた。
唾が亀頭をぐにぐにと刺激し、光己が竿の部分を力強くシコシコと上下させる。乳首の舐め方も非常に手慣れたもので、時々歯型をつけながら交互に効果的な責めを繰り広

げてくる。
　最初こそ光己の存在に戸惑っていた唾だが、三日も尻を並べて雄二に犯され続けると二人はすぐに打ち解けあった。こうして雄二に奉仕する連携も、かなりの上達を見せている。
「んふふ、雄二くん♡　おばさんとチューしましょう……んちゅ……♡♡」
　光己は一通り右乳首を舐め回すと満足したのか、顔を近づけて唇を押し付けてきた。雄二は美女と鼻頭を押し潰しあいながら、彼女のツンツンの髪を優しく撫でる。
「ちゅ、ちゅっ……ん、なんか雄二くんの唾、どんどん美味しくなってきたわ……はむ、れる……♡♡」
　ぽーっと火照った表情で、光己は雄二に口内を舐め回される。甘い痺れを持った雄二の唾液が染み込んできて、とぷりと触られてもいないのに愛液がソファを濡らしていた。
「んー……おちんちんみたいに、唾液にも個性が乗り始めたのかしら……」
　唾はそんな二人のキスを物欲しそうに眺めた後、雄二の股間に向かって頭を下げた。
「れろぉ、れる……ぢゅっ、ぢゅぱっ……♡♡」
　自身の手を退けて、亀頭を舐め始める。くっさいちんぽ臭と口の中に広がる媚薬カウパーに股間をもぞもぞさせながら、舌を表面に這わせる。

すると合図も出さずに光己の手が、肉竿から雄二の乳首に入れ替わった。まるで睡の代わりに乳首をねぶるようにして、くにくにと摘んでは弾いてくる。

声を出さずとも、二人は雄二のためならどうするのが最適かなどと容易に判断出来た。

「んふっ、ぢゅっ、ぢゅるるっ……はぁ、このおちんぽ、やっぱり大きすぎるわ♡♡♡」

そう言いながらも、睡の口淫は徐々に過激になっていく。根元を両手で固定し、口に含む範囲を段階的に広げていった。

顎が外れそうになる程大きく口を開きながら、唇の締め付けでカリ首を刺激して射精を促してくる。

同時に鈴口を舌先でこじ開けるようにしてほじり、ずぞぞと吸引してくる。

雄二は腰をカクカクさせて今にも射精しそうになっていた。

「ちゅっ、にちゅ、じゅる……雄二くん、我慢しないで思いっきりイッて……♡♡♡」

「ああっ、で、でるっ……!!」

光己が力強く雄二の乳首を引き延ばすのと、肉棒から精子が飛び出すのはほとんど同時だった。

「んぐぅぅぅっ……!!?♡♡♡」

突然の射精、睡は手をばたつかせながら慌てていた。雄二は本能のままに彼女の頭を

抑えつけると、無理やり喉奥に押し込んで射精を続ける。
びゅぐぅ、と粘っこい白濁液に喉を犯されて、睡はお尻をぴくぴくさせぬがらごぼごぼと溢れるような声で鳴いていた。
長い射精の間、睡をそっちのけで雄二と光己はラブラブカップルのように熱いキスを繰り広げていた。気持ちよく射精してもらうために全力で淫らなキスを光己は行なっていた。
「んぐ、ごほぉ……♡♡」
規格外の金玉から作り出された、これまた規格外の量の精子。ようやく射精が完了すると、リスみたいにほっぺを膨らませた睡がゆっくりと顔を上げた。
よく見ると鼻から垂れているし、涙目であるが、それでも彼女は嬉しそうにその子種汁を飲み下していた。喉元を液体が通るたびに、ごくりと音がなる。
雄二はその様子を見て鼻息を荒くすると、すぐにまた肉棒を硬くした。
「次はおっぱいの時間ね♡」
光己はそんな雄二の股間を見て喜色の笑みを浮かべると、ソファから降りて股の間からひょっこりと顔を出した。
「んふふ、おばさんのデカパイ、気持ちいい？♡♡♡」
ひくんひくんと震える巨根を、左右から包み込むようにして乳肉がたぷたぷと詰め

寄ってくる。三十センチは優にある雄二のペニスだが、その半分以上を光己の巨乳が覆ってしまっていた。

「光己さんのパイズリ……」

雄二の呟きに光己は頷くと、重たそうな乳房を持ち上げてペニスを扱き上げた。

根元からカリ首まで、撫で上げるようにして法悦の柔らかさがちんぽを抱擁する。たぷんたぷんとスライムのようにエロ乳が姿を変えて、視覚的にも大変いやらしいパイズリが雄二を襲っていた。

「すぐ出ちゃいそう……」

「出して♡　私も雄二くんのエッチなザーメン飲みたくなっちゃった♡♡」

光己は唾が美味しそうに口の中の精子を飲み干す様を見て、嫉妬するように乳房の上下を激化させた。

ずりゅ、ずりゅ、と左右の乳房を交互に持ち上げては、おっぱいの肉が絡みつくように両側から抱きついてくる。たぷたぷと雄二の足に乳肉がぶつかって、光己の巨乳が我慢汁によってぬるぬるになっていった。

幸せな快楽に、雄二の腰は痙攣するように動き、鈴口をくぱくぱと開閉して今にも射精しそうだった。

「ごく……ん……♡♡　美味しかったわ、雄二くんの精子……♡♡」

うっとりとした表情を浮かべて睡はイカ臭い口を開くと、ソファから降りた後に光己と同じようにして乳房を雄二の剛直に押し付けた。

光己は片側を譲るようにして肉棒の片側に乳肉を寄せると、二人してぎゅーっとおっぱいでちんぽを挟み込んだ。

「おっぱいが……すご……」

雄二の目の前に、極楽のような光景が広がっていた。肉棒を中心として、四つのエロすぎる膨らみがその柔らかさを押し付け合っていた。

美女二人は頷きあうと、息を合わせてずりずりとちんぽを奉仕し始める。

大ボリュームのおっぱいが、雄二の快楽のためにいやらしく変形していた。たぷっとした密着感の中に、二人のこりこり乳首が見え隠れする。

亀頭の辺りを包み込むようにして、乳肉の中から先端が出たり入ったり。もはやおっぱいしか見えていない時も、ちんぽが乳肉に包まれて心地よい。

そんな巨乳の下では、睡と光己の細い指が玉袋を弄んでいた。中の玉を左右に引っ張ったり、優しく揉んだりしながら、着実に雄二の興奮を高めていく。

「また出るっ……」

幸せすぎる快楽に、巨根の耐久力が終わりを迎えた。

ぶるっと震えた肉棒の先っぽを、すかさず光己が口に含む。

「はむっ……♡♡♡♡」

どびゅっ、どびゅっ、どびゅっ、どびゅうううっ。

金玉から突き抜けるような射精に、雄二は放心状態のような表情で天を見上げる。

四つのデカパイに密着された上での、絶頂。二人の美女が陰嚢を揉む度に、びゅぐぅ、と押し出されるように精子が飛び出て、光己の口内を犯していく。

そんなちんぽに口を窄めて、ちゅーっとストローのように光己はザーメンを吸い取っていく。雄二は目をチカチカさせながら、吸われるがままに精子を差し出してしまう。

「ぷはぁ……♡♡♡」

結局全てを飲みきった光己は、満足そうに笑ってちんぽを口から離した。唾液の橋が口元に掛かり、それをいやらしく指で拭き取る。

しかし、ダブルパイズリでこってり絞られたはずの肉棒は未だ元気なままで、次はどうしたとビクビク跳ね回っていた。

「これも訓練よね……♡♡」

二人の美女は目を爛々と輝かせると、再び乳房を持ち上げてちんぽを扱きだした。

「あぅ、二人のおっぱい気持ちいいよぉ……」

雄二は大好きなヒーローの彼女と、美人すぎていつもドキマギしていた人妻にパイズリされながら、股間の声に従って肉棒に力を込めた。

入学試験

「ここが雄英高校……」

雄二は受験生の流れに従いながら、ふと立ち止まって校舎を見つめた。

大きく「H」の形をしたガラス張りの巨大建造物。もちろんヒーローの頭文字である事は考えなくてもわかるが、そんなふざけた校舎が許されるのもこの学校がヒーロー育成の象徴たる所以だろう。

「よし……」

ぱんぱんと両頬を叩くと、覚悟を決めて試験会場に向かう。

せっかくプロヒーローであるミッドナイトに鍛えてもらった三年間である。その期待に応えるべく、雄二はここまで頑張ってきた。

合格してみせる、絶対に。

ーーーーーーーー

別にヒーロー志望だった訳ではない。
そもそも雄二は、無個性であることに不満はなかったのだ。
だから、個性を得ても何も変わらないと思っていた。
けれど、勝己の言葉を受けて、なんとなくだが、自分にも夢があることに気がついた。
彼に守られたように、自分もまた彼を守りたい。
そして願わくば、彼のサイドキックに――は他に適任者がいるかもしれない。無個性でもヒーローを目指す彼とか。
だから雄二は、彼の隣ではなく、彼女の隣を目指すことにした。
大好きな人を守るために。ミッドナイトをすぐ隣で守るために。
彼女の相棒に。ヒーローになる。
それが雄二がこの学校に行こうとした理由だった。
「すごいな……これ……」
「流石雄英高校だな……」
「でも広すぎるわよ……」
雄英高校が用意したらしい仮想市街に、雄二を含めた１００人以上の受験生たちが

立っていた。実はこの少し前に更に多くの学生たちが集められていた訳だが、グループ分けされた今はこの人数である。

本物の街さながらに作られた風景にそれぞれがキョロキョロと辺りを見回し、或いは自身の獲物は何処だと目を光らせていた。

学力試験の方は言うまでもないが、この実技試験に至っても構造自体は実にシンプルだった。

この仮想市街に放たれた学校が用意した敵――エネミーをより多く倒し、より多くのポイントを得る。それが試験の内容だ。

そしてもちろん個性ありの試験だ。

「……」

開始の合図まで各々が精神統一を図る中、雄二もまた自身の個性にとって必要な情報を集めていた。

「女の子の数は二十人近く……もっとか……でも臭いの届く距離はせいぜい二、三人だ……」

当たり前だが、全国から入試志願者が集まっているため、その総数は何千といるだろう。その中には当然女性もいるはずだが、何せ数が数だ。雄二が予想していたよりも、ずっと個性を活かしにくい状態だった。

「仕方ない、数より質か……」
雄二はその小さな身体を活かして受験生の群に潜り込むと、とりあえず一番発育の良さそうな女の子に目をつけて真後ろに陣取った。
赤みがかった茶髪に、長いサイドテール。挑戦的な笑みを浮かべて前を見据えているが、その身体つきもなんとも中学生とは思えないほど挑戦的というか、豊満だった。
運動着に着替えているので、よく鍛えられた美脚や、腰つき、上半身の筋肉などよく観察出来るが、素晴らしい。
雄二はむくりと体操服の股間を膨らませていた。
『ハイ、スタート』
しばらくすると、気の抜けた声と共に試験開始が知らされた。
戸惑い、疑問符を頭に浮かべるのも一瞬。全国から集まった精鋭たちは、勢いよく走り出す。
目の前の彼女も、そんな一群に紛れて駆け出そうとしていた。
「ごめん、すぐ気持ちよくなるから……!」
そのタイミングで、雄二はタンと音を立てて跳躍すると、軽い身のこなしで彼女の両肩に手を置いた。
「えっ……!?」

事前に受験者同士の妨害は禁止と告げられていたため、相当焦った声で悲鳴をあげそうになる彼女。雄二は心の中でもう一度謝りつつ、跳び箱の要領で頭上を飛び越え。

そして、くるりと振り向き、股間を押し付けた。

「むぐぅ……!?」

ズボン越しに臭いを嗅がせるようにして、グイグイと金玉を押し付ける。端正な顔立ちの鼻頭に、凄まじいちんぽ臭が捻じ込まれ、尻餅をつくようにして後ろに倒れた。

雄二は彼女が頭をぶつけないように気をつけながら、尚も股間を押し付けていた。それこそ床オナニーでもするように、腰を動かして股間を押し付ける。

「ん、ふぅ……っ……♡♡」

抵抗しようともがいていた彼女の手が、力をなくしていく。

それどころか何故か雄二のお尻を撫で始め、ぺろりと陰嚢の部分をズボンの上から舐め始めた。

トドメを刺すように、ぐりぐりと玉袋を美貌の凹凸に押し付ける。彼女はビクビクっ、と腰の辺りを大きく震わせ、ぐったりしてしまった。

「これくらいかな……」

雄二は立ち上がり、股間を膨らませたまま彼女を助け起こした。

彼女はとろんとした目つきで雄二の股間を見つめながら、素直に立ち上がる。

「僕は飛野雄二。君は？」
「――拳藤一佳。よろしく♡♡」
雄二は頷くと、彼女を屈ませて顔面をペロペロ舐め始めた。
雄のフェロモンを染み込ませるように、じっくりと舐め回す。
「ほんとは僕の女にしちゃうのが一番早いんだけど、流石にそこまでは許されなそうだしとりあえず一時的に僕に惚れてもらうね」
「うん。よくわかんないけど、私頑張るから……♡♡」
顔中を唾液まみれにして一佳は鼻息を荒くすると、恋する乙女のように頬を染めて頷いた。
個性のフェロモンをたっぷり乗せた唾液に、一佳は完全に雌になっていた。
雄二は能力が機能していることを確認すると、ひとまず正面から抱き付いて、勃起した股間をピッチリしたスパッツの股に押し付けた。
土手肉が浮き上がってひどくいやらしいおまんこに腰をへこへこさせながら、下乳を揉み上げる。
「んっ……♡♡」
「ごめん、ちょっとだけ。一佳さん凄いエッチな身体してるから……」
もはや個性の調整など関係なく、性的興奮のために雄二はおっぱいの谷間に顔を突っ

込んでいた。
「え、あ……な、なに、してるの……？」
「あれ、見られてた？」
声のする方向を見ると、へたりとその場に座り込んだ女の子が一人。
辺りを見回しても、みんな自分のポイントを稼ぐ事に躍起になっていて、他人を気にしている様子などない。
雄二は「ちょっと、失敗したな」と額をぽりぽり掻きながら、一佳から離れて、その女の子を指差した。
「一佳さん、捕まえて」
「うん――！」
一佳は素早く距離を詰めると、グンと巨大化させた掌で少女の身体を地面に抑えつけた。
意味がわからないともがく彼女に、雄二は時間を惜しむように小走りで近づいた。
「すぐ気持ちよくなるから、そんな変態みたいな目で見ないでよ」
雄二は再び股間を押し付けた。
野糞でもするように腰を下ろして、玉袋のふにふにと押し付ける。その様子を一佳は羨ましそうに見つめている。

「後のことはやっておくから、とりあえずポイント稼いできていいよ」
「飛野は？」
「この子とお話してから。三人で協力して合格しよう」
「りょーかい、早く追いついてね！」
一佳は巨大な掌を小さく縮小させて、駆け出していった。
その後ろ姿を眺めながら、よいしょと腰を持ち上げる。
「う……あっ……♡♡」
もわっとした臭気から解放され、ピクピクと死んだ昆虫のように仰向けので手足を広げる少女。
黒髪のボブカットに、ヘッドホン。耳元から伸びているのは、イヤホンジャックだろうか。
可愛らしい少女だ。
「立てる？」
「た、立てる……大丈夫……」
手を伸ばすと、おっかなびっくり彼女はその手を掴んできた。
彼女もまた整った顔立ちをした、将来有望な美少女であった。雄二は股間をビンビンに膨らませながら、自己紹介をする。

「飛野雄二です、協力しよう」
股間の膨らみを初対面で押し付けてきた少年は、さも何もなかったかのように微笑んだ。
そんな彼を見て、少女はポッと頬を赤らめながら頷いた。
「ウチは……耳郎響香……♡♡♡」
雄二は頷くと、彼女のお尻を触りながら、一佳を探して周りを見まわした。
「一佳さんの個性はわかりやすかったんだけど、響香さんは？」
「えと……コレ、かな……♡」
耳から伸びたイヤホンジャックが、意思を持つように動き出した。
雄二は頷くと、お尻にあった手を膝裏に移動させ、軽々と響香をお姫様抱っこした。
小柄な彼とは思えない腕力に、響香は乙女の喘ぎ声を上げながら、背中に当たる硬い何かに身を硬直させていた。
「僕は性的興奮すればある程度力が出るパワー系ね。そんなわけでおっぱい舐めさせて」
「いや意味わからん……って、あっ♡♡　だ、だめっ……♡♡」
運動着に顔を埋めると、フローラルな女子の香りを堪能しながら雄二は軽々と十メートル近く跳躍した。

「う、ウチのおっぱいっ♡♡　あぅっ、服の上からコリコリすんなっ……♡♡♡」
「まずは一佳さんを探そう。おっぱい吸ってないと力出ないから、しばらくこのままね。いい匂いだよ、響香さん……くんかくんか……」
「い、いや、マジで、意味わかんないぃっ♡♡　一佳って誰だよぉっ……♡♡」

入学初日

無事に雄英高校に合格した雄二は、今日からあのオールマイトを育て上げた学校で三年間過ごす事になった。

実は教師陣だった睡から「君は凄いグレーゾーンだったんだけど、何より野放しにしておく方が危険っていう理由で通ったんだよね」とあまり聞きたくない報告を受けた雄二であったが、合格できたのは事実なのでそこは諦めることにした。一応即席のチームプレイなどで評価もあったらしいが、やはり最初のあれは悪印象の塊だったらしい。

しかし、それでも合格した。

それは雄二にとって、己の個性に対する恐怖を少しでも減らせる機会を得た事を意味する。

そもそもの目的は、この個性の制御が必要だったからだ。放っておけばご近所さんの家庭崩壊は免れず、下手をすれば街中を歩くだけで女が寄ってくるような個性のため、雄二はこの学校に入る事で光己のような事故を防ごうとしていた。だからこの数年は外にもあまり出歩かなかった。

全ては個性を制御するため。

勿論、こうして入学するまでに個性の使い方から、基礎的な身体能力の向上と、手取り足取り鍛えてくれたのは睡である。お陰で彼女には頭が上がらないし、お礼として毎晩たっぷりとセックスをしている。今朝だって時間の許す限り睡とイチャイチャセックスをしてきた雄二であった。

「あ、いたいた」

校門をくぐると、入試の時に出会った一佳が駆け寄ってきた。初対面で股間を押し付けてしまった美少女である。

制服に身を包んではいるが、あの顔立ち、あのサイドテール。どう見ても拳道一佳その人だ。

「やっぱり受かってたんだね」

「当然。飛野も受かってると思って探してたんだ」

そういうと一佳はやたらと距離を詰めてきた。あんな事をされて何故そんな予想を立てたのか不明だが、彼女は確信があったらしく嬉しそうに雄二の手を握ってきた。

「……？」

思わず、違和感に首を傾げた。

もう個性のフェロモンの効果はないはず。あれは時間的な限定を設定して惚れさせただけで、半日と持たずに催眠は解ける。そう睡と訓練したはずで、それなのにどうし

てここまで好意的なのか。
雄二にはそれが分からず、きょとんとした顔で彼女を見つめる。
彼女も分かっているはずなのだ。自分は利用されたと。そしてうら若き乙女の顔面にひどいセクハラをされたと。
それなのに、この表情。明らかに雄二に好意を抱いている。それが理解できなかった。むしろ嫌われる方が納得できる。
「……一佳さん、僕に何か用なの？」
雄二は訝しむように眉を顰めて、距離を取ろうとする。
「わー、待った待った……！　違うって復讐とかじゃないって……!!」
一佳はわたわたと慌てて両手を振り回すと、敵意はないと大げさにアピールした。
その後、仕切り直すようにこほんと咳払いすると、彼女はちょいちょいと手招きする。
雄二は尚もよく分からない表情を浮かべていたが、とりあえず従おうと片耳を差し出す。身長は彼女の方があるため、自然と向こうが膝を曲げる姿勢になった。
彼女は内緒話でもするように口元に手を当てて、囁くように喋った。
「あの日から飛野の事が忘れられなくて、疼いて疼いてしょうがないんだ……♡♡」
完全にとろけた雌の声を聞いて、雄二は即座に後悔した。
フェロモンが強すぎたのか、それとも彼女と相性が悪かったのか。

いや、良すぎたのか。
ともかく、もうだめだ。
――彼女、拳道一佳は、雄二の雌になってしまった。
「放課後、空けといてね♡」
一佳はそれだけ言い残すと、元気よく駆け出していった。
去り際に、頬に軽いキスを残して。
「不味いよ……睡さんに学校じゃ『雌』を作らないって約束したのに……」
雄二は学校と睡への言い訳を考えつつ、その後を追っていった。内なる雄が、さらにその強大さを増している気がした。
「はぁ、幸先悪いなぁ……」
校舎の中に入りながら、雄二はため息をついた。
校舎――というより、ビルの中は様々な教室があった。どれもヒーローとして育てるために必要なものなのだろう。その名の通り、個性には人それぞれ様々な力が宿っているから、それに合わせて様々なスペースが必要に違いない。
凄い学校だ。流石はヒーローアカデミア。
そんな事を考えながら、目的地のA組の教室前までたどり着く。
A組の教室には、雄二の目の前であの爆轟勝己が入っていった。

彼の努力は知っていたので、雄二は自然と口元が緩んだ。
「良かった、かっちゃんも受かったんだ」
親友も合格していたとあって、雄二の口元も綻んだ。
――が、その後を追うようにして一人の少年が教室に入っていった時は我が目を疑った。
「え……？」
ボサボサの緑髪なんて、そうそういるもんじゃない。
緑谷出久。無個性であり、雄二と勝己の幼馴染。
どうして、ここに居るのか。彼は無個性だったはずなのに。
ありえない。まさかこの期に及んで個性の発現があったのか。
「……」
そこまで考えて、自分も以前はそうだったと首を振った。
自分に出来て、出久に出来ないはずはない。彼は自分よりもよっぽどヒーローに憧れていたのだから。
「あれ、アンタ……」
「はい……？」
雄二が廊下で立ち止まっていると、黒髪の少女が声をかけてきた。

耳から伸びたイヤホンジャックが特徴的な、美少女。
彼女も、入試の時にチームを組んだ。名前は耳郎響香だったか。
「え、えと……♡」
響香は雄二の顔を見てほっぺを真っ赤にすると、棒立ちになってしまった。
当然だが個性は使っていない。でもこの様子は明らかに雄二に対して何かしらの感情を抱いているように見える。
入試の時、やはり個性の調整を失敗したようだ。それとも個性の成長か。
どちらにしても、強く、魅了しすぎた。
「とりあえず、休み時間にまた話そう。今は遅刻しちゃうよ」
「あっ……♡」
雄二は彼女の手を取ると、教室に足を踏み入れた。
響香はふへへと締まりのない顔でニヤつきながら、その後に続く。
その後の事は、雄二にとっては予想できるものばかりだった。
勝己が出久に対して怒鳴り散らした事。同様に雄二に対してもここはお前の来るべき場所ではないなどと大声で詰め寄ってきたり。
他にも相澤と名乗る担任が、最下位は除籍処分などと脅しをかけてクラスメイト達の実力を測ったりなどと、これも予想通り。もっとも、流石に退学にまでさせられるとは

思っていなかったが、個性の把握は必要なことなのだろう。それは分かっていた。
だから、雄二にとって予想外の事といえば、それは放課後の出来事だった。

ーーーーーーーー

「はぁ、やばい、これ……♡♡♡」
「すんすん……♡♡♡」
そして放課後。
空き教室の隅、人目から逃れるような場所に、三人の生徒の姿があった。
椅子に座る雄二は、股座に顔を埋める二人の女生徒に申し訳なく思いながら、強烈な雄臭を嗅がせる。
一佳と響香は、頬をくっつけながらその股間に鼻を押し付けていた。なによりもあの試験の時の雄を感じるために。
「くっさ……♡♡♡」
「はぁ、はぁ……♡♡♡」

一佳の用事とはこれだった。あの日以降、雄二が忘れられない。雄二のフェロモンが忘れられない。濃厚な雄の臭いに、雌の部分を思いっきり叩き起こされたのだ。

響香もまた、同じである。あの日の雄二のせいで、オナニーにふけり、あの時顔に押し付けられたちんぽを思い出す日々。

そんな彼女達は、ちんぽの香りを忘れられないでいたのだ。

ここに二人の雌が生まれていた。

経験上、こうなってしまうと元の彼女達に戻ることはない。ただ一方的に、雄二に尽くしたいと、そう思い、身体が動いてしまうそうだ。

まだ挿入にまでは至っていないので完全に堕ちた訳ではないが、それも時間の問題だろう。このお預け状態を長引かせると、その分発情する時間が伸びるだけだ。

「ごめん二人とも。これは僕の責任だ……でも、これ以上は良くないと思うから……」

それでも、雄二には理性が働いていた。これは訓練の成果であり、事故を防止するために最も力を入れて特訓したものだった。光己のような事件を繰り返さないために。

学生同士、これ以上進んではいけない。それに会って間もない二人には、なにもかも結論を出すには時間が足りないと考えていた。処女を無くしてからでは遅いのだ。

そう言って立ち上がろうとする雄二だが、ありえないほど強い力で椅子の上に抑え込まれる。

少女達は危なげな表情で頬を赤くしながら、少しでも雄二の雄を感じようとグイグイ迫ってくる。

徐々にこの状態に、雄二のペニスも勃起しかけていた。このまま時間が経てば、光己の時のように流れるまま二人を犯してしまうだろう。

いや、そんな事はさせない。自分は成長したんだ。

「ごめん……！」

雄二は殆ど女性に向けていいレベルではない力で無理やり立ち上がると、逃げるように走り出した。性的興奮が肌の表面に血管を浮き上がらせ、上半身がパンプアップしたように図太くなる。

個性の応用だ。主な用途は小さい身体でも女体を持ち上げて腰を振れるようになるというものだが、こうして身体能力向上にも使える。

二人は尻餅をついていたが、幸いにして頭をうったりと怪我はなさそうだった。

「待って……!!」

ホッとしたのもつかの間、二人はすぐに立ち上がり、追いかけてきた。

雄二は全速力で走った。興奮しかけだったが、それでも美女二人にあんなことされれば、個性は十分に発動できる。

漫画のような筋肉のつき方になった脚力を使い、雄二は凄まじいスピードで帰宅し

た。

ミッドナイト＆爆豪光己２

「それで逃げてきたの？」
「そうだよ、大変だったんだから……ぁ、光己さんっ、もっとタマ舐めて……」
「ふふ、分かった……はぷ、ちゅ、ちゅぱぁっ、ちゅっ、ぶっ……♡♡♡」
その日の夜、もはや当たり前のように睡の家で全裸生活を過ごす三人は、リビングにて雄二の入学初日の話に耳を傾けていた。
ソファにどかりと座った雄二は、隣に居る睡の背中に手を回し、無造作に揉みしだく。股間には熱心にちんぽを舐める光己が居た。
女達は、自分の肉体を味わってもらおうと身体を押し付け、或いは手慣れた手コキと舌フェラで雄二に奉仕する。雄二は時折キスを二人としながら、当然のように雑談を繰り広げていた。
そんな状態で会話をするのは、三人にとっては別に珍しいことではなかった。強いて挙げるとすれば、雌の役割がチェンジする時もあるぐらいだろう。
「ほんと、おっきいタマタマ……♡♡　この中にあのザーメンがたっぷり入ってると思うと、たまらなく舐め舐めしてあげたくなっちゃう……♡♡♡」

光己は自分の股座に手を突っ込みながら、玉袋に頬ずりして、優しく刺激してくる。思わず雄二が手を伸ばし彼女の頬に触れると、光己はぽっと頬を赤らめ、愛玩動物のように媚びた表情で上目遣いになった。

早く挿入したい。そんな感情にグッと支配されるが、ひとまず睡に報告が先だと、光己にフェラを続けさせた。後頭部を抑え込んで肉棒の根元に顔を密着させてやると、まだおまんこの時間じゃないと理解したらしい彼女は、鼻を鳴らしてまたペロペロと男性器を舐め出す。

「光己さん、良い子良い子」

「んふ……♡♡♡」

金玉に鼻を埋めていた人妻は、だらしない顔で静かに笑っていた。

雄二は手のひらに突き刺さるようなツンツンの金髪を撫で付けつつ、睡に視線を送る。彼女はドン引きするような視線で雄二を見ていた。

「……鬼畜にも程があるわよ」

「え、なにが？」

今更この程度の事で嫌悪されるとは全く考えられず、だからこそ雄二は素で聞き返した、

睡は「光己の方じゃない」と首を振る。そして、何かに堪えるようにキツく目を瞑っ

て、静かに雄二に片乳を揉まれていた。
「その子達……今日は地獄ね。雄二くんにこうやっておっぱい一つ揉まれなかったんでしょ？」
「だって、それこそそんなことしたら二人の人生が……処女って大事だよね？」
睡は首を振った。
当たり前のことを否定されて、雄二は変な顔をした。
「普通はそうだけど、雄二くんに出会ってしまったら別よ♡　運命の相手が決まっている女であっても、それとも誰とも交わらない女だったとしても……どんな女でも出会えば貴方になるの♡♡　それが雄二くんの魅力♡♡♡」
睡は雄二に抱きつき、ほっぺにキスをする。
まだよくわからない雄二は、首を傾げて言葉の続きを待った。
「要するに、こんなちんぽ押し付けられてお預けなんて、死ぬほど辛いって事♡　雄二くん、明日はちゃんとその子達を抱いてあげて♡♡」
「え、なに言ってんの睡さん……？」
「だってぇ、かわいそうよ♡　これを知らないなんて……♡♡」
睡は光己に舐めまわされているちんぽに熱っぽい視線を送った。
雌を増やさないという約束は何処へ行ったのか。雄二はため息をついた。

そんな事はしない。もう雄二には、雌が二人もいる。それもとびっきりの美女が。
二人のまんこを比べながら犯しているだけでも贅沢なのに、そんな――
『なら、その穴を四つにするのも変わらない』
――その通りだ。
「う、まだ……」
『もうこの穴の数では満足できない』
――そうだ。
『犯せ、犯せ、全てを犯せ』
――自分は雌を増やさなきゃならないんだ。
「……お、犯せ……犯せ」
『お前はもはや、雌なしでは生きられない。増やせよ雌を、成せよ子孫を』
――増やさなきゃ、雌を。子を増やす、女を。
「……え？　何か言った、雄二くん？」
心配そうに見つめる睡に、気にしないでと軽く首を振る。
「――そうだね、睡さんの言う通り、二人も仲間に入れてあげようと思う」
睡は安心したように頷くと、ソファに寝転がり、仰向けで脚を開いた。
指先で黒い陰毛の中心を、いやらしく左右に開く。

「そろそろおまんこの時間じゃないかしら♡♡」
くぱぁ、と膣液を垂らすまんこに、巨根が跳ね回る。早く種付けしたいと光己の口の中にとびっきり効果の強い媚薬を分泌する。
「んぅ、ぁ、っ、い、いぐぅっ……♡♡♡」
フェラチオをしていただけなのに、光己は全身を掻き毟りたくなるような甘い電流を喰らって、おまんこから勢いよく潮吹きした。口内に残る濃厚なちんぽ臭と、媚薬カウパーに、繰り返しアへ顔を決める。
「睡さん」
雄二は美女が股を開いた目の前の光景に鼻息を荒くし、光己からペニスを取り上げると睡の身体にのしかかった。
豊乳の谷間に顔を埋めながら、マン毛に肉棒を擦り付ける。むっちりした肉体に興奮は収まらず、尚も女を絶頂に導くカウパーを垂れ流していた。
「入れるよ……」
「あ、ちんぽ来た……♡♡♡」
とろとろの裂け目に、太すぎる肉棒が侵入しようと先端を突き刺してきた。
雄二の個性によって分泌された我慢汁がおまんこの入り口に塗布されて、早くもエクスタシーに飲まれる睡。とんでもない所に危ない目で視線を飛ばしながら、ガックン

ガックン腰を震わせる。
「睡さんっ……！」
少年は構わず巨根をぶち込んだ。「ひぐぅっ♡♡」っと豚の鳴くような声を聞きながら、ピストンを開始する。
「おっ、おぐぅっ♡♡♡　いきなりぃっ♡♡♡」
どちゅ、どちゅ、とおまんこが潰れる音を立てて、剛直が素早く出入りしていた。上から押し潰すように、睡の体内に打ち込まれている。
それと同時に大きな金玉が重々しく叩きつけられる。蟻の門渡りを破壊力抜群の玉袋が刺激するたびに、睡が弓なりに身体を反らして泣き叫ぶ。
「まんこっ、睡さんのエロまんこっ……！」
「激しいっっ♡♡　雄二くんのデカチンにっ、おほっ、まんこ、あんっ、開きっぱなしになっちゃうっ、ぁっ♡♡♡♡」
内蔵ごと持ち上げるようにちんぽが突き刺さり、睡は今にも絶頂し過ぎて死にそうな表情を浮かべていた。
雄二は上体を起こして彼女の美脚を掴むと、正常位で腰を振りたくる。
「雄二くん、ちゅっ、ちゅむ……♡♡♡」
「むぐぅ……」

背中にはいつのまにか復活した光己が、デカパイを押し付けて抱きついてきた。エロすぎるディープキスで雄二に吸い付きながら、悪戯っ子のような手つきで睡の股間に手を伸ばす。

睡が叫び声を上げた。

「だっ、だめぇっ♡♡　クリトリスうっ、弄らないでぇっ♡♡♡」

「可愛いお豆さん……雄二くん、弄ってもいいわよね？♡」

「うん……っお願い、光己、さんっ……！」

本人の意思は関係なしに、合意がなされた。

光己の細指が陰核を摘み、容赦なく弄くりまわす。女性同士ならではの遠慮のないクリトリス責めに睡は絶叫してしまう。

雄二のちんぽを相手取りながら、そんな事をされて耐え切れるはずもなかった。じょぼじょぼと小便みたく潮を吹いておまんこを絶頂させる。

鋭い締め付けに、雄二もまた限界を迎えた。

「で、でるぅ……！」

「ほぉぉぉぉっ……♡♡♡♡」

びゅぐぅっ、びゅっ、びゅぶるるる。

睡のポルチオに突き刺さった肉棒が、ありえない量の精子を放った。

びゅうびゅうと壊れたホースのようにスペルマを吐き出し、女の身体に種付けを行っていく。

美女のまんこに、何も考えず種付け射精。

雄二は自然と愉悦の笑みを浮かべて、頬ずりをしてくる光己の唇を奪った。

「はむ、ちゅ……雄二くんとの、ベロチュー、好き……♡♡♡」

「僕も好きだよ、光己さん……ちゅっ」

アクメ顔の睡は、ビクビクと全身を波打たせて絶頂の真っ只中にいた。雄二はぬぷんと肉棒を抜き取ると、ソファを降りて彼女の顔面に押し当てる。

「ち、ちんぽぉっ♡♡　イキたてのでかちんぽぉ♡♡　イキながらちんぽ臭嗅ぐの気持ちよすぎるぅっ♡♡♡」

まだまだ止まらない射精。鼻の穴に種付けするように鈴口を持っていくと、絶頂確定の精子を垂れ流して睡を狂わせる。

脳天に視点を彷徨わせてアヘ顔になる美女に興奮した雄二は再びソファに乗り上げると、玉袋ごと睡に押し付けた。

「むぐぅっぅっ……♡♡♡」

嬉しそうな悲鳴を聞きながら、ちんぽの先端を巨乳の谷間に挟む。顎先からでも胸元に余裕で届くサイズに、対面の光己はうっとりしていた。

「次はおばさんよね♡」
「もちろん。光己さん、おまんこ準備して」
光己は頷くと、何故か睡の膣に指を突っ込んだ。
そのまま中の精子を書き出すように、くちゅくちゅと激しく指を動かす。
「んんっ、うううっ……!?
!!♡♡♡」
手足をばたつかせる睡に構わず、光己はその指についた白濁液を自分の股の間に運んだ。頭髪と同じ色の陰毛に、デコレーションでもするように乗せると、最後は雄二を挑発するようにいやらしく指を舐めた。
「はやくぅ……おまんこ待てないわよぉ……♡♡♡」
「光己さん、エロ過ぎ……」
雄二は睡の女体にちんぽをこすりつけながら移動し、光己にむしゃぶりついた。

放課後の保健室1

「はぁっ、はぁっ……！」

寝室に移動した三人は、飲まず食わずのまま二回戦に突入していた。

「いいっ、これちんちん刺さってるぅっ……♡♡♡」

シーツを握りしめてよがり狂う光己は、乳房を大きく揺らして雄二に犯されていた。片脚を抱きしめられながらの高速ピストンに、まんこを洪水のように湿らせる。

所謂松葉崩しの体位。むっちりした美脚に頬ずりしながら、雄二は人妻の膣内を犯しまくる。今日だけで十回は膣内出しされたエロまんこは、今なお貪欲に精子を求めてきゅうきゅうと締め付けてきていた。

「光己さんっ、気持ちいいよぉっ……！」

三年間、欠かさず犯した雌である。雄二は腰の角度に変化を加えながら、絶えず弱点をカリ首でゴリゴリと刺激する。それが余程良いのか、光己は大きな喘ぎ声をあげて何度も身体を捻っていた。

「っ……♡♡♡　だめぇっ、そこ頭おかしくなるぅっ……♡♡♡♡」

浅瀬の辺りを特大の亀頭でかき回すと、面白いように光己は感じまくった。そのまま

円を描くようにぐりんとまんこをほじり、油断している最深部に勢いよく痛打する。
「ひぐぅっ♡♡♡♡」
舌を突き出して意識が飛びそうになる光己。瞳は虚ろながらもハートマークを浮かべていて、彼女は高校生に翻弄されっぱなしだった。
中学三年間、毎日セックスに明け暮れていた少年は、個性も相まって今や完璧な女殺しとなった。光己一人で立ち向かっても、数秒でアクメ地獄に落とされる。
「光己さん、イッて……エッチな顔見せてっ……！」
雄二は巨根を子宮にめり込ませると、お尻の肉を揉み揉みしながら軽く射精した。
個性を活かした、雌を絶頂させるためだけに編み出された射精技。どびゅびゅっ、と精子がおまんこの一番奥にぶちまけられて光己が震える。
「お、おっ、ちんぽ汁でてるぅっ……♡♡」
お腹を肉棒の形に膨らませながら、人妻はまたしても絶頂した。喘ぎ声を上げながら、身を反らし、股間からはマン汁に精子が混ざって垂れてくる。
いやらしい表情で絶頂しながら、雄二の男根をこれでもかと締め付けてくる。大きすぎる陰嚢をヒップに押し付けつつも、吸い取られるようにしてスペルマを膣内に吐き出す。
「みつき、さん、っ……！」

びゅぐぅっ、と最後の一滴まで絞り出す射精。いつのまにか本気の種付け射精になっていて、精子が膣内に溢れかえっていた。

未だに個性が制御しきれていないという証明だが、そんな野暮なことを指摘する者はこの場にはいなかった。何せ無尽蔵に精液が湧いてくるのだ、膣を並べて分配するという事はあっても、節約なんて考えもしない。

雄二はむっちりとした両脚を左右に開いて、尚も長すぎる射精を続ける。

「雄二くん……♡♡♡」

アヘアヘと虚ろな瞳で、光己は雄二を受け入れるようにして手を広げた。

汗まみれの顔と、汗まみれのおっぱい。雄二はすぐに抱きついた。

「あぁんっ、射精しながらおっぱい揉み揉み気持ちいいっ……♡♡」

光己の表情が一段と蕩けたものに変化した。

すっかり精子に溺れたまんこは、へこへこと腰を押し付けられてイキ地獄を継続させている。デカチンがじゅぷじゅぷと弱々しく膣内を掻くたびに、人妻エロまんこが悲鳴をあげて絶頂する。

「光己さんの……れろぉ、はぷ……デカパイ、ちゅっ、ぢゅる……」

「あぅ、そんなに揉み揉みしながら吸っても、お乳出ないわよぉ……♡♡」

「出なくても美味しいよ……」

乳輪をなぞるように舌先を動かし、母乳を搾り取るように口をすぼませて吸引する。豊かな乳房が引っ張られて、いやらしく変形した。

「水持ってきたわよ」

「っちゅっ……睡さん、ありがとう」

そんな二人を横目に、ベッド横のナイトテーブルに二リットルのペットボトルを置く睡。雄二はちんぽを抜いて起き上がり、冷蔵庫から取り出してきてもらったそれを開けると、豪快にラッパ飲みする。

よく見れば彼女も汗まみれで、全裸の上に股の間から白濁とした体液を垂らしたままだ。先ほどまでたっぷりと雄二に犯され続け、やっと解放されて全員分の水分を取りに行っていたのだ。

「はぁ、はぁ……♡♡♡」

息も絶え絶えで光己は股間をガクガクさせたまま仰向けで横たわっていた。

しばらくは使えないと判断した雄二は、ミネラルウォーターをゴクゴク飲み干しながら睡を隣に手招きした。

「雄二くん……♡♡」

乳首をビンビンに勃起させて、睡は発情した顔で雄二の身体に抱きついた。おっぱいを押し付けるように向きを変えて、いつでも揉んでもらえるようにアピールを欠かさな

い。

それはこの三年間で身体に嫌という程教え込まれた雌の本能からである。今や個性を使われれば乳首に息を吹きかけられただけでも絶頂するようになった睡は、その雌としての役割を果たすために主人に自分を犯してくださいと、自然に身体が雄二を誘惑するように躾けられてしまっていた。

「れろ、れろぉ……♡♡♡」

雄二が何度かに分けて水を飲んでいる間に、睡は首筋に垂れてくる汗を熱心に舐めていた。おまんこはあれほど膣内出しされたにもかかわらず、興奮した愛液がドバドバと溢れてシーツを濡らしている。

犬のように身体を舐めてくる美女。雄二はペットボトルを置くと、バキバキに反り返らせた肉棒に力を込めて、睡をそのまま押し倒した。

「あんっ……♡♡」

光己のお腹を枕にするようにして寝そべらせると、睡の唇を貪る。彼女の耳元にある光己のデカパイを無造作に揉みしだきながら、ラブラブカップルも真っ青のベロチューを行う。

「睡さん、おまんこ開いて」

「……♡♡♡」

命令されるがまま、睡は下品に股を開いて男根を待ち構えた。マン汁まみれの肉棒が、再び雌の穴に挿入されていった。

その日も、雄二は朝方まで二人を抱いた。

その頃には、「彼女達」を雌にする事に抵抗は無くなっていた。

女を抱けば抱くほど、更に雌が欲しくなる。三年間極上の雌を抱いたが、もっと様々な女を味わいたかった。現れた新たな雌によって、ギリギリの部分で耐え凌いでいた最後の壁が決壊してしまった。

もはや何故「彼女達」を拒絶していたのか思い出せないまま、雄二は翌日、股間を膨らませて学校に向かった。

『そうだ、雌を増やせ……』

――子を、増やさないと。

ーーーーーーーー

「それで、改めて聞いておきたいんだけど。二人はこうなっても大丈夫？」
「はぁっ、はぁっ、ちんぽぉ……♡♡♡　ちんぽすきぃ♡♡♡」
翌日の放課後、睡に頼んで第二保健室を貸し切りにしてもらった雄二は、二人に雌のなれの果てを見せていた。
「れろぉ、ん、ちゅっ……♡♡♡」
ベッドで仰向けになりながら、熱心に雄二の男根をしゃぶるプロヒーロー・ミッドナイト。いつもの色気たっぷりのコスチュームを身に包む彼女だったが、乳輪と陰唇を隠すタイツの部分は綺麗なハートマークに切り抜かれていた。そこからビンビンに膨らんだピンクの乳首とヌレヌレのおまんこが見て取れる。
雄二はベッドサイドに立ち、餌やりの要領でちんぽを与えながら睡の頭を撫でて。
そして、入り口に立つ二人の生徒を見た。
「うっわ、エッロ……♡」
「だめだ、めっちゃ羨ましい……♡♡♡」
拳藤一佳と、耳郎響香だ。二人は雄二が声を掛けると考えは間も無く頷いて付いてきてくれた。
余程限界だったのだろう。雄二はそう思うと申し訳ないなと考えながら、同時に雌が

増えることに喜びを感じていた。
雌が、増える――
それは異様な光景だった。
ヒーローコスチュームに身を包んだ教師を、全裸の男子高校生が真顔で犯していた。
校内の保健室で。
更には女生徒二人にその様子を見せつけているのだ。
尋常な光景ではない。
それなのに、その場で現状がおかしいことを指摘する者は誰もいなかった。
そこにいたのは、一人の雄と、三人の雌だった。
「二人共、君達が雌になれば僕が犯しまくる。それでもいいなら――」
「当たり前っ……♡♡」
「ウチも……♡♡♡」
これ以上は我慢できないと、二人の美少女はまだ着慣れていない制服をその場で脱いでいく。
雄二は睡の頭を持ち、顎を天井に向かせるようにして首を固定すると、彼女達のストリップショーを見ながらイラマチオを始めた。
「おごぉっ……!?!♡♡♡♡」

ベッドの外に引っ張られるようにして頭を浮かされた睡が、いきなりの抽送にくぐもった悲鳴をあげた。喉を軽く押さえ込みながらのちんぽ突きに、嘔吐の感覚が込み上げてくる。

それでも睡はその「快楽」に身体をのたうち回らせていた。肉棒から分泌される麻薬のようなカウパー、鼻っ柱に叩きつけられる玉袋から発生する耐え難い雄フェロモン。何より愛する少年からの熱い腰振りに、身も心もメロメロだった。

「んぐぼ、ぢ、ぢゅぶるっ、ぢゅっ、おぇっ……♡♡♡」

ピストンの動きに合わせるように、睡が舌を動かしてくる。頬をすぼめてちんぽに吸い付いてくると、下品な唾液の弾ける音が保健室に響く。

雄二は愛する雌の奉仕に背筋をゾクゾクさせながら、同級生の脱衣を見つめていた。

「よいしょっ……♡」

一佳の手つきは素早く、それでいて気負いのないものだった。ボタン一つ外すにしても緊張感は感じられず、一見するとただ着替えているだけのように見える。

しかし、ブラウスを脱いだところでその雰囲気は一変した。真っ白なブラジャーは、なんとも暴力的な膨らみを隠していたのだ。

「おっきいな……」

思わず声に出るくらいのボリューム感だった。

無論、睡や光己と比べてしまうと差はあるが、しかし高校生になりたてということを鑑みても不釣り合いなサイズだった。

そして、彼女は躊躇いもなくブラジャーのホックを外した。

「……♡」

ぷるんと全体を露出させた巨乳。さくらんぼ色の乳首が、まるで彼女の興奮を表すように可愛らしく勃っていた。

流石に彼女もここまでくると恥ずかしいのか顔を赤らめていたが、それでも雄二になら見せてあげたいとばかりに根性で身体を隠そうとする腕を押しとどめ、見せつけるように胸を晒していた。

とてもいやらしい身体つきだった。高校一年生でありながら、出るところは出て、引っ込むところは引っ込む、ナイスバディだ。

おまけに日頃のトレーニングを欠かしていないのであろうその肉体は、その筋肉をはっきりと主張していた。

雄二は鼻息が荒くなってしまう。

「……う、うう、マジかよぉ♡」

その隣では、ゆっくりとブラウスのボタンに手をかけながら、一佳の脱ぐスピードにドン引きしている響香がいた。

彼女は一佳ほど羞恥心を捨てられないのか、今もぷるぷると顔を赤くして震えながら、ゆっくりと腕を動かしていた。それでもこの場から逃げようとしないあたり、相当彼女も雄二に対して狂信的な好意をもっているのだろう。

「お、ごほぉ、ひぶぅっ……♡♡」

別に無理やり脱がせているわけではないのだが、なんだか悪い事をしている気分になる。

しかしそれがなぜか、雄二を妙な興奮に導いていた。その興奮をオナニーでもするように睡にぶつける。

「うごぉ……!!?♡♡♡」

手元で睡の呻く声が聞こえた。無視して響香の身体つきをガン見する。

黒と紫というなんともパンクなブラジャーを震える手つきで外す響香。現れたのは可愛らしい膨らみの美乳。この場にて大きくバストサイズの平均を下げる彼女だが、雄二にはあれもまたご馳走にしか見えなかった。恥ずかしそうに震える乳首を見て、あらぬ妄想が掻き立てられる。

一佳と比べると頼りない肉付きの肢体である。とはいえあの細くくびれた腰回りや、なんだかいじめたくなる顔つきは立派に雄二の雄を刺激していた。

「二人共、おいで」

残すところ股間の布切れ一枚となった彼女達を手招きする。健康的な肉付きの一佳と、ほっそりとしたフォルムの響香が、頬を真っ赤にして近寄ってきた。
「うわ……うわうわ……♡♡♡」
「ウチも……これ、みたいに……うぅ……♡♡♡♡」
二人の少女の目は、睡に釘付けだった。
雄二は自分の雌を誇らしげに思い、見せつけるようにペニスを反り返らせた。
「睡さん、二人にちんぽ奉仕のお手本見せてあげて……っ！」
「んぶぅっ、おっ、ぶっ、おえっ、ご、おっ……!?♡♡♡」
荒々しく腰を振って喉まんこを見せつける。
二人は呼吸をばっちり塞ぐようにちんぽを咥え込んでいる彼女を見て、あまりの刺激の強さに目を瞬かせていた。
それでも、目を逸らさない。
何故なら、自分も同じように扱われる事を、身体が望んでしまっているから。
「はぁ、はぁ、飛野……♡♡♡」
「ウチも……♡♡♡」
抱いて欲しい。
抱いて欲しい。

この雄に身体が壊れるまで犯し抜いて欲しい。
そんな感情で、二人は「ご主人様」を見つめていた。
「二人共、可愛くて綺麗だよ……」
「あっ♡♡♡」
「んっ……♡♡♡♡」
雄二は贅沢に二人の乳房を左右で揉んだ。
右手にたっぷりとした質感の一佳パイを。
左手には今すぐ食べてしまいたいくらいの可愛らしい響香パイを。
むにむにと丹念に揉む。
「は、ぁぁっ、な、なにこれぇ……♡♡♡」
「おっぱい……ウチのおっぱい溶けて、ぁっ……♡♡♡」
手のひらに広がる女子高生の乳肉。性欲に従うまま、たぷたぷと揉みくちゃにする。
一佳の巨乳を下から持ち上げるようにして掴み、響香の可愛い乳輪を何度も指でなぞる。
思わず腰砕けになる美少女達。
雄二は無理やり立ち上がらせるように、キュッと乳首を真上に引っ張る。
「ひぐぅぅっ……!!?♡♡♡」

「いっ、あああぁっ……!!?♡♡♡」

あへぇ、と舌を突き出しながら何とか姿勢を保つ一佳と、あまりの刺激の強さにその場で尻餅をついてしまう響香。

ますます雄二の加虐心をくすぐった。

「一佳さん、手を貸してあげて」

「う、うん……だ、大丈夫っ……？♡」

「あ、ありが、と……うっ……♡♡」

手を握って、ふらつきながらも何とか立ち上がる。

まだ雄二に引っ張られた感触が残っているのか、二人共片方だけ乳首をぷるぷると震わせていた。

「睡さん」

「んぼぉっ……ごぽぉ……お、げほぉ、おぇっ♡♡♡」

嗚咽と共に唾液まみれのちんぽが姿をあらわす。

雄二は鞘から抜き取るように肉棒を取り出すと、改めて二人を抱き寄せた。

放課後の保健室2

雄二は真上を向いて屹立する男根を見せつけながら、二人を抱き寄せる。
「これが、飛野の……♡♡♡」
「うわ、グロ……♡♡♡」
そこにあるのは雄二の個性。雌を魅了し、犯す、絶倫の巨木。反り返った肉の塔は、雌を求めて大きな傘をヒクつかせている。
興味津々でじろじろとそれを見つめる一佳と響香。その瞳にはもはや肉棒しか映っておらず、いかに個性の影響が強いのか改めて確認出来た。
もう、彼女達は完全に雌なのだ。
雄二はそんな二人の尻肉をがっしりと掴むと、肉棒が彼女達のお腹に触れそうになる距離まで密着する。
胸板に一佳の大きな乳房が潰れ、逆サイドには響香の乳首がツンツンと当たる。
美少女達の荒い息遣いが、すぐそばにあった。
自然と手に力が入り、尻肉に更に指を食い込ませる。
「二人共、お尻もちもちしてて気持ちいいよ」

「ん、そ、そう？♡　お尻の感触褒められたことないから分かんないけど……飛野が気持ちいいなら、良かった♡♡♡」
「ウチのお尻、気に入った……？♡♡♡」
飛野は頷き返しながら、二人の尻たぶを持ち上げる。
腕を巻きつけて股の間まで手を伸ばすと、アナルから蟻の門渡りを撫で上げるようにしてショーツの前面を中指で撫で上げる。
「ひっ、やぁんっ……♡♡♡」
二人が揃って声を上げる。
構わず土手肉に指を這わせ、くにくにとおまんこの入り口を布越しに弄る。じゅんと熱を持った女性器はぷにぷにと柔らかく、カリカリとパンティを掻くようにして刺激してやると二人共こちらに倒れ込んできた。
「うぅ、飛野ぉ、好き……♡♡♡」
「ウチも……はぁ、すんすん……♡♡♡」
柔らかな女子の身体に思わず肉棒がヒクつく。
雄二はだらしない顔で暫くおまんこを弄ると、突然キュッとパンティを引っ張った。
陰唇を真っ二つにするように、女子高生の下着がいやらしく形を変える。
「あ、う……♡♡」

「っ……♡♡」

二人を解放すると、改めて二人の股間を眺める。

一佳の股間は女性らしく手入れされた陰毛が生え揃っており、逆に響香の股間にはまるで生えていない。パイパンという単語が頭をよぎった。

すぐさま脱ぐように命令すると、二人は恥ずかしそうに頷いた。

「……♡♡♡」

「う、うぅ……♡♡♡」

自信なさげに隠そうとする響香の両手を捕まえながら、今度こそ何も着ていない二人の裸体を拝む。

健康的で筋肉のついた一佳の肉体美。

スレンダーで舐めまわしたくなるような細い体系の響香。

素晴らしい雌だった。

「ぁ……♡♡♡」

気がつくと響香の細い腕を引っ張っていた。

不安と発情の入り混じった瞳で見つめる彼女を、雄二は保健室のベッドに押し倒した。

羞恥と初体験の恐怖に震える少女を抱きしめると、かぷりと鼻っ柱に噛み付いた。

「ん、おごっ!?♡♡♡♡」
「れる、はぷ……ぢゅっ、ぢゅぱっ……ぢゅるるっ……」
唾液をたっぷりと絡ませた舌を、鼻の穴に突撃させる。ずっぽりと差し込み、奥の方へと舌先を伸ばすと、ぶちゅぶちゅと唾液まみれになりながら舐め回す。
「んほぉ、おぉ、ぶぁ……♡♡♡」
響香は雷にでも打たれたかのようにビクついて白目を剥いていた。
快楽と幸福に苛まれてどうにかなりそうな、そんな表情だった。
ひっくり返ったカエルのような体勢で、ひたすらに鼻を舐められている。
雄二の太い幹のような肉棹が、無毛の恥丘をすりすりと撫でまわしていた。
「響香さん、良い？」
「……ぅ♡♡♡」
しばらくそうしてセミのようにくっついていたが、やがて雄二は唾液ででろでろになった響香の顔を解放した。
上体をゆっくりと起こし。次いで、太く反り返った肉棒の先端を、柔らかな土手肉にあてがって、ふにふにと刺激してくる。
「ひ、ひの……そ、その、ウチ……えと……初めて……だから……♡♡♡」
「雄二って呼んでよ。大丈夫、優しくするから……」

「うぅぅっゆ、雄二いっ――♡♡♡」

茹で蛸のように顔を赤くして、こくこくと必死に頷く彼女。

雄二はゆっくりと腰を沈めていった。

「ぐぅ、は、はぅっぅ……!?♡♡♡」

男性として申し分ない形を誇る巨根が、ズブズブと少女の中に侵入していく。細いお腹をぽっこりと肉棒の形に膨らませ、その膨らみは徐々にへその辺りまで広がっていく。

みち、みちみち、と股の間から裂ける音がして、鮮血が溢れ出した。

けれど、個性によって快楽を何倍にも増幅させられた響香は痛みなど感じておらず、好いた人と一つになる事や単純な息苦しさで呼吸を荒くしていた。

「ほら拳藤さん、私達もぼーっとしてちゃだめよ?♡♡」

「ふぇ……?」

先を越された、などとちょっぴり考えながら、同時に自分もこうなるのかと立ち尽くしていた一佳だが、唾はそれを良しとせず雌の心構えを教えるように雄二に背後から抱きついてみせた。

見せつけるように巨乳をたぷたぷと押し付けて、柔らかい膨らみをいやらしく変形させてみせる。

「んふ、雄二くん……そのまま可愛がってあげて♡♡」
睡はゾクゾクするような蠱惑的な笑みで、雄二の脇腹をつうと撫でながら彼の肩に顎を乗せていた。
ぷっくりと膨らんだ乳頭をこりこり押し付けて、彼の耳をくちゅくちゅと舐めている。
「ひ、飛野……♡♡♡」
気がつくと一佳も、背中に抱きついていた。
例え同級生を抱いている最中だとしても、どうにかして自分にも意識を割いてもらおうと、すけべに身体を押し付け、同時に邪魔にならないように身体中にキスの雨を降らせる。
「んちゅ、れろ、ん……♡♡♡」
「は、むちゅる、ぢゅっ、れるぉ……♡♡♡」
そんな二人に雄二は優しい口づけをしてやると、視線をまた響香に戻した。
「ん、ま、待って待っ――ぁぁぁぁぁぁっ、ぁぁっ♡♡♡」
そして、抽送が始まった。
響香の細いくびれを捕まえて、荒々しく腰を叩きつける。
深く刺し貫かれるたびに亀頭が子宮を押し上げ、響香が悲鳴をあげる。

「おっ♡♡　おっっ♡♡」とオットセイのように詰まった鳴き声で、ただ犯されていた。

「響香さんっ、まんこキツキツでっ、はぁっ、可愛い、可愛いっ……！」

雄二は止まらなくなった機関車のように腰を振りたくった。相手が処女だったなんてとうに忘れ去り、おびただしいフェロモンと媚薬カウパーを撒き散らして彼女を犯した。

「おっ、ぉぁっ、や、やめぇっ、ぢ、ぢんぽっ♡♡♡　おちんぽふとすぎぃっ、じぬぅぅっ♡♡♡♡」

濁点まみれの嬌声が保健室に響いた。

相当息苦しいのか、響香は女性とは思えない表情で何度もアクメを重ねていた。

それがたまらなく可愛く見えて、雄二は背の二人を押しのけると再び彼女にのしかかった。

「んぶっ、んんぅっ、ぢゅぷ、ぢゅぞっ……♡♡♡」

唇を重ねると、響香は拙いながらも愛のこもったキスをはむはむと行ってきた。

雄二はそんな彼女の頭を抱え込むと、腰を上から叩き下ろすようにしてまんこを攻めながら熱烈なキスをお返しした。

ばちんばちんとピストンの激しさを物語る破裂音が鳴る。

二人の目線が絡み合い、ぼうっとした瞳で見つめ合う。
「んふぅぅぅっっ――♡♡♡♡」
気がつくと二人は果てていた。
どびゅぅ、びゅっぅ、びゅぅぅぅぅっ。
殊更に膨らんだ肉棒が、恐ろしい量の子種を膣内に吐き出す。
繁殖するなら他の追随を許さない個性が、玉袋からびゅうびゅうと白濁液を送ってきていた。
ポンプのように太い肉棒が波打ち、響香はそれに合わせるようにして絶頂を繰り返して身体を震わせていた。

放課後の保健室3

「雄二くん……♡♡♡」
睡の声に雄二が振り返ると、そこには新しく用意されたベッドの上に寝転ぶ二人の雌の姿が。
「飛野、飛野ぉ……早くぅ……♡♡♡」
こちらに尻を向けるようにして四つん這いになった一佳。
睡の指によってくぱりと開かれたおまんこから、白さの混じった愛液を垂れ流していた。
首を限界まで捻ってこちらを見る一佳の表情は、切なそうに発情していた。
眉尻を下げて、とろんとした瞳。ねっとりと口を半開きにして、いやらしく舌をだらんと垂らしている。
よほど睡に弄られたのか、もう何もかも限界の雌犬のような状態だった。
「響香さん、今夜家に来ない？」
そう尋ねると、彼女は腕の中で静かに頷いた。
ろくに思考回路も残ってなさそうなアヘ顔で、それでも行きたいと意思を示すよう

に。

帰ったらまた抱こう。

雄二は新たな雌に愛情を覚えると、その額にキスをして肉棒を抜いた。

ぬぽん、と太く勇ましいペニスが、ぽっかりと響香おまんこに穴を開けて抜き出された。開ききった陰唇から固形とも液体ともとれぬ白濁液がぼどぼどと溢れ出してきた。

「一佳さん」

彼女に近づくと、肉棒を尻に置く。むっちりと肉の詰まったヒップに、すりすりと竿の部分を擦り付ける。

「飛野……♡♡♡」

「おまんこ、びちょびちょだね……」

「あ、そこ、お、お、っ……！♡♡♡」

濡れた秘裂に手をやると、むにむにと土手肉を刺激する。陰毛の生え際のラインを撫でては、くぱくぱとおまんこを閉じたり開いたりしてみる。

むっちりと肉付きのいい太ももを触りながら、或いはお尻にキスをしながら、おまんこを何度も撫で回す。

「うう、はや、く、はやくぅ……♡♡♡」

お預けを食らった犬のような顔で一佳はケツを振っていた。淫らに、そして性欲を隠

すことなく、ちんぽに媚びる腰使いでお尻を振っていた。
雄二はベッドの上に乗ると、一佳の上に跨り、コアラのように彼女に抱きついた。
「あっ、おっぱいぎゅむっ、て、ぁっ……♡♡♡」
重力によって垂れ下がった巨乳を下から掴むと、いやらしく変形した乳房から歓喜に震える彼女の様子が伝わってきた。
「柔らかくてもちもちしてて……気持ちいいおっぱいだよ、一佳さん」
「う、ぁ、ぅひぃ……♡♡」
柔尻に金玉を押し付けながら、乳房が細長く伸びるように遠慮なく揉みつぶす。
「はぁっ、はぁっ……おっぱい……んんっっぅ……♡♡」
虚ろな眼で虚空を見つめ始めた一佳。
雄二は微笑み、耳元に舌を這わせるとくちゅくちゅと音を立てて耳たぶをしゃぶりだす。
そのまま右手を伸ばし、両乳の間に差し込んで首筋に触れる。子猫をあやすように顎を撫でてやると、彼女はぶるぶると身震いした。
「ひのぉ、もうむりぃ♡♡♡」
「じゃあ名前で呼んで」
「う、ん……ゆ、ゆうじ……ちんぽ下さい……♡♡♡」

「分かった」
脚をガニ股に開いたまま更に腰を落とすと、巨根が彼女の下腹に触れた。
大きく太い肉棒は一佳のへそ付近までゆうに届いており、こんなものが体内に入れば
どうなるのかなんて分かりきっていた。
それでも一佳は本能に逆らえず、マン汁を垂れ流しながら膣口を擦り付けた。
大好きな人の、大きなペニスに。
「行くよ」
そして、パンパンに膨れ上がった亀頭がぐずぐずのまんこに侵入し始めた。
「う……お……ほぉっ……♡♡♡」
左右の乳房をいやらしく鷲掴みにされながら、一佳は処女を食い破らんとする体内の
巨根に冷や汗をかいていた。
やばい。こんなの無理。
こんなのでさっきの奴みたいにズボズボされたら、絶対死ぬ。何回も死ぬ。
例え個性でどんなに魅了されていようとも、それだけははっきりと分かった。
だから、必死に抵抗しようとした。
だが、敵わなかった。
「だ、だめだめ、やっぱ……し、しぬ……♡♡」

やっぱ抜いて。
そう言おうとして、一佳は子宮に直接ぶち込まれた衝撃に思考をぶち壊された。
ずんっっっ。
「おぼぉっ!?♡♡」
口から内臓が飛び出るかと思うほどの衝撃が下腹部から突き抜けてきた。
「一佳さんのまんこ、鍛えてるせいか凄い狭くて気持ちいいよ……我慢できない……!」
雄二はその言葉と共に太い肉棒を抜き出し始めた。
めりめりと初物の膣を破壊するような弩級のちんぽ。一佳は軽い酸欠に陥りながら、それでも個性によって身体は反応し続け、膣を愛おしそうに締め付けてしまう。
大きなカリ首がにゅっと外に出た瞬間、ぷぽっ、と空気の漏れる音と共に再び深く叩きつけられる剛直。
「一佳さんっ……おまんこ気持ちいいっ……」
「あっ、おっ、おぅ、ぁぁぁあっ、あんっ、あんっ、ぁあぅっぅ♡♡♡」
ピストン運動は途端に激しくなり、雄二の腰が振り子時計のように素早く前後する。
太く大きなペニスに、一佳はごりごりと膣を穿たれた。
ちんぽの根元までずっぷりと差し込まれるたびに、尻肉が波打ち、快楽のあまりぷしゅっと潮が飛沫をあげる。

「う、おっぱい大きくてっ、おまんこもきゅんきゅん締め付けてきて……一佳さん大好きっ……！」

「――？　！！♡♡♡」

睦言を囁かれるだけで怒涛の快楽が押し寄せてくる。

鋭敏になった膣の感度が振り切れて、ちんぽが動くたびに気がおかしくなりそうな気持ち良さが身体中を弾け回った。

姿勢も保てなくなり、ベッドに顔を埋めながら良いように犯される一佳。

「あっ、あんっ、ちんぽっ、ちん、ぽっ……雄二の、でかちんぽっ……だ、だめになるぅ……　♡♡♡」

乳房を乱暴に揉みしだかれ、膣壁がめくれるような怒張をお構い無しに叩き込んでくる。

視界がホワイトアウトするような感覚に陥り、一佳はとろけた顔でマン屁を垂れ流す機械になっていた。

ずんっ、ずんっ、と太すぎる肉棒が刺さるたびに、呼応するようにぶぽっ、ぶっ、と空気の潰れる音が響く。

一佳にそれを羞恥するような余裕はもはやない。

あるのはただ、絶対的な雄に屈服させられている雌としての幸福のみ。

大好きな彼に犯されているという事だけである。
「はぁ、っ、一佳さんっ……！」
ぎゅむ、と力一杯おっぱいを揉まれる。
そのまま親指と人差し指が乳首を摘み、くにくにと引っこ抜くように引っ張った。
「んぎぃっっ♡♡♡♡」
何かとてつもないものが脊髄を駆け巡り、一佳はあへぇと情けない顔で絶頂した。
「出すよっ、出すっ……!!」
それと同時に、ひときわ勢いをつけた最後の一突きが繰り出された。
どびゅぐぅっ、びゅぐるっ、びゅっ、びゅぐるるるっ。
「おほぉぉぉぉぉっ♡♡♡♡」
ばちばちと音を立てて身体がスパークする。
大きな音を立てて脈動するちんぽが、どっぷどっぷと子宮口に精液を叩き込んでくる。
さながら放水するような勢いのそれに一佳のおまんこは瞬く間に溺れて、ちんぽを咥えてぎちぎちに開いたその隙間から白濁液をどぷりと溢れさせた。
「う……ぁあ、ぁ……」
雄二は深い絶頂に、ただ巨乳にしがみついてエクスタシーが終わるのを待った。

立て続けの新たな雌に身体は歓喜の雄叫びをあげ、凄まじい量の白濁液を流し込んでいた。
ぐりぐりと亀頭を押し込んで、孕ませようと本能的に身体が反応する。
ひく、ひく、と身体を震わせて、二人は長い間イキ続けた。